

2015年は、イタリアでも、各地でヒロシマ・ナガサキを忘れずに、核なき世界の実現を目指そうと、決意を新たにする市民の動きが見られました。

資料センター『雪の下の種』は、数々の企画に関わった一年を振り返り、非暴力思想の普及に取り組むガンジー・センターから監修の依頼を受けて、『サティアグラハ手帖』29号にその報告をまとめ、今年6月に刊行しました（目次は次頁）。

このブックレットは、日本からご執筆、ご協力頂いた方々の未発表の記事と目に触れる機会の少ない資料に加え、イタリアで行なわれた企画の小アルバムを収録したものです。

翻訳・編集・発行 2016年7月

資料センター『雪の下の種』 イタリア・ピサ

Centro di documentazione "Semi sotto la neve"

Via O. Gentileschi, 6/A 56123 Pisa - Italia

[www.semisottolaneve.org](http://www.semisottolaneve.org)

Blog (イタリア語): <http://semisottolaneve.blogspot.com/>

E-mail: [info@semisottolaneve.org](mailto:info@semisottolaneve.org)

ご協力頂いた方々 [敬称略、姓五十音順]

大谷敬子、エリザベッタ・カルデッラ、ミシェル・シボ、美帆シボ、  
マヌエーラ・スリアーノ、高原孝生、田代礼子、田中穂子、  
キアラ・チェッリ、土肥秀行、ロレンツォ・バスティーダ、  
アンドレア・フィオレッティ、ステファノ・プツォーリ、  
マルティーネ・フリゼッリ、ジェラルド・ブレイロック、堀場清子、

長崎原爆資料館被爆継承課

長崎大学核兵器廃絶研究センター (RECNA)



## イタリア語版目次

ロッコ・アルティエーリ 「核兵器は、廃絶されるべきもの」（ガンジー・センター長の序）	7
<b>第一部 被爆証言： 苦しみを整理し共有する</b>	
アーサー・ビナード 『さがしています』（抄訳） 写真：岡倉禎志、童心社刊 ピカドンとの出会い 詩四篇（時計、眼鏡、鍵束、入れ歯） 証言者たちのプロフィール	14 24 24
資料 I 広島・長崎の原爆被害の概要（長崎原爆資料館） 8月6日の最大の犠牲者は? 1945年の広島	26 29 30
田中稔子 天井の穴の向こうに、青空が（インタビュー） 交流スペース アート&ピース	31
堀場清子 「その空が・・・」「花の季節」「宿命の八月」	57
<b>第二部 記憶、記録し、伝え、継承する</b>	
堀場清子 検閲されたヒロシマ・ナガサキ 高原孝生 若者たちを変えるヒロシマ（インタビュー）	63 81
美帆シボ＆ミシェル・シボ サダコのつるをフランスの空に（インタビュー）	87
資料 II アルバム ピサの空に舞う折り鶴たち 路上ペインティング for Peace	99
田中稔子 壁面七宝作品 原子爆弾とは?（長崎原爆資料館） 世界の核弾頭データ2015（RECNA） 世界の核物質データ2015（RECNA） 世界の非核地帯（国連）	104 109 110 111 112
<b>第三部 ピカドンについて、もっと知る</b>	
マヌエラ・スリアーノ 日本文学におけるヒロシマ・ナガサキ 用語解説 付録：資料センター『雪の下の種』所蔵の関連欧文文献目録 ヒロシマ・ナガサキを扱った映画作品リスト、リンク集 平和への誓い 2010年8月6日 子ども代表	117 139 144 147 150
齋藤ゆかり 体験を「理性」の肥しに～監修を終えて 資料センター『雪の下の種』刊行物リスト 筆者プロフィール	153 158 159

## 日本語抄訳版目次

<b>第一部 被爆証言： 苦しみを整理し共有する</b>		
資料 8月6日の最大の犠牲者は、だれ? 1945年の広島	4 6	
田中稔子 天井の穴の向こうに、青空が	8	
堀場清子 花の季節	21	
<b>第二部 記憶、記録し、伝え、継承する</b>		
堀場清子 伝えられなかったヒロシマ・ナガサキ 高原孝生 アメリカの若者たちを変えるヒロシマ 体験	22 36	
美帆シボ＆ミシェル・シボ サダコの「つる」を、フランスの空へ	41	
アルバム ピサの空に舞う折り鶴たち ～路上ペインティング for Peace	49	
田中稔子 壁面七宝作品	54	
齋藤ゆかり 体験を「理性」の肥しに～監修を終えて	57	
資料センター『雪の下の種』の10年 刊行物リスト	61	
このブックレットに収録されていない記事の原典については、以下をご覧ください。		
アーサー・ビナード『さがしています』 童心社、2012年 広島・長崎の原爆被害の概要、原子爆弾とは?（長崎原爆資料館HP） 堀場清子「その空が・・・」『堀場清子全詩集』ドメス出版、2014年 「宿命の八月」詩誌『いのちの籠』31号（2015年10月） 世界の核弾頭データ2015、世界の核物質データ2015： 長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）HP 世界の非核地帯（国連HP） 広島平和記念資料館、中国新聞ヒロシマ平和メディアセンターHPも資料が豊富です。		
「用語解説」の項目：建物疎開、広島・長崎原爆投下から終戦まで、ヒバクシャ、 原爆孤児、ABCと被爆者が受けた扱い、アサヒグラフ1952年8月6日号、 太平洋における核実験と第五福竜丸、日本における原子力エネルギーの導入、 子どもたちに世界に！被爆の記録を贈る会、ピースポート。		

## 8月6日の最大の犠牲者は?

被爆当日8月6日における年齢階級別死者数割合  
原爆被爆者動態調査報告書（平成25年3月広島市編集）を用いて

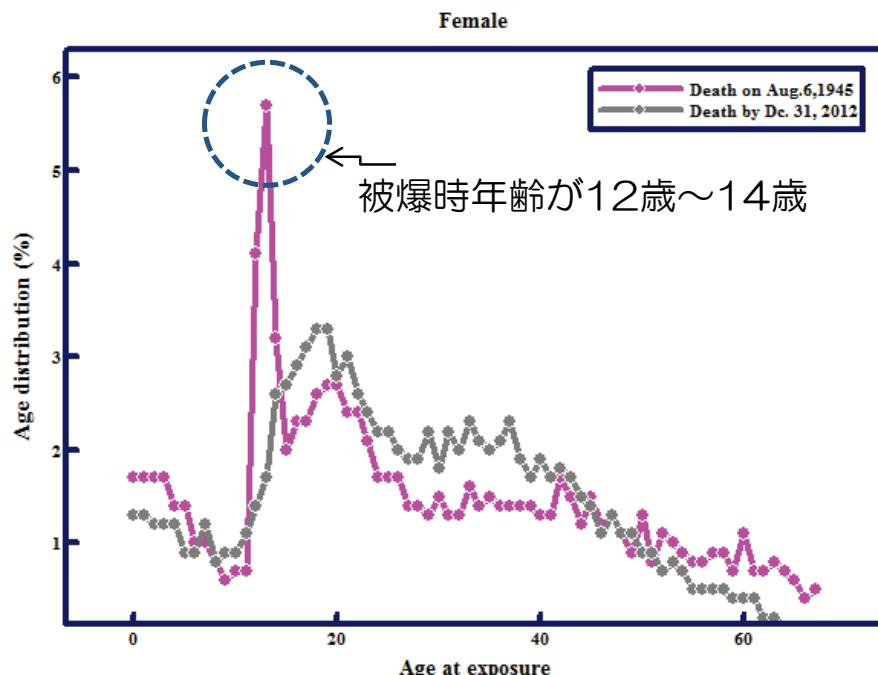
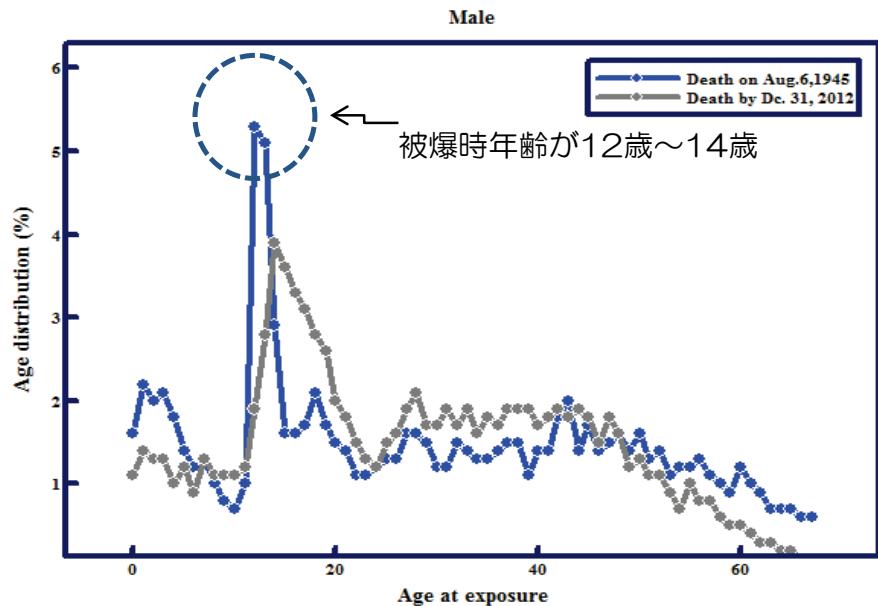
広島大学原爆放射線医科学研究所 大谷敬子

ブルーの線:  
1945年8月6日の男性死亡者の被爆時年齢分布

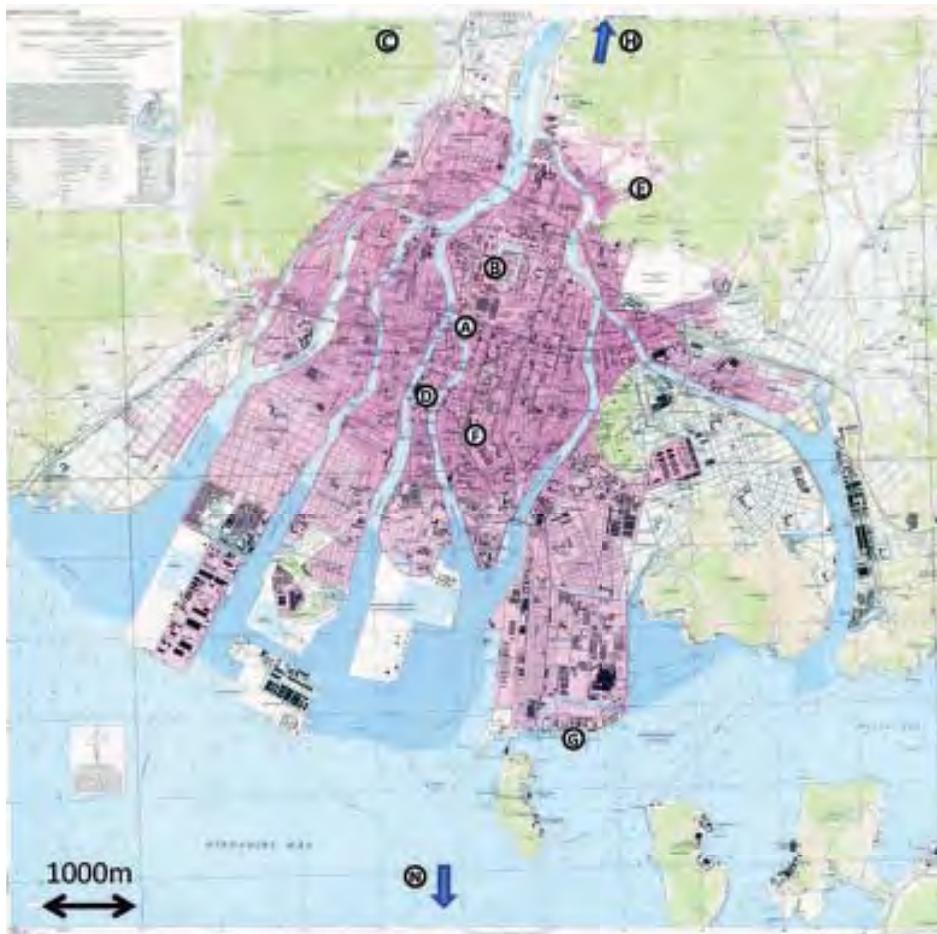
ピンクの線:  
1945年8月6日の女性死亡者の被爆時年齢分布

グレーの線:  
被爆による初期の死亡が収束したと考えられる1946年1月1日  
から2012年12月31日までの死亡者の被爆時年齢分布。  
爆死の影響を取り除いた場合の被爆時年齢分布を示している。

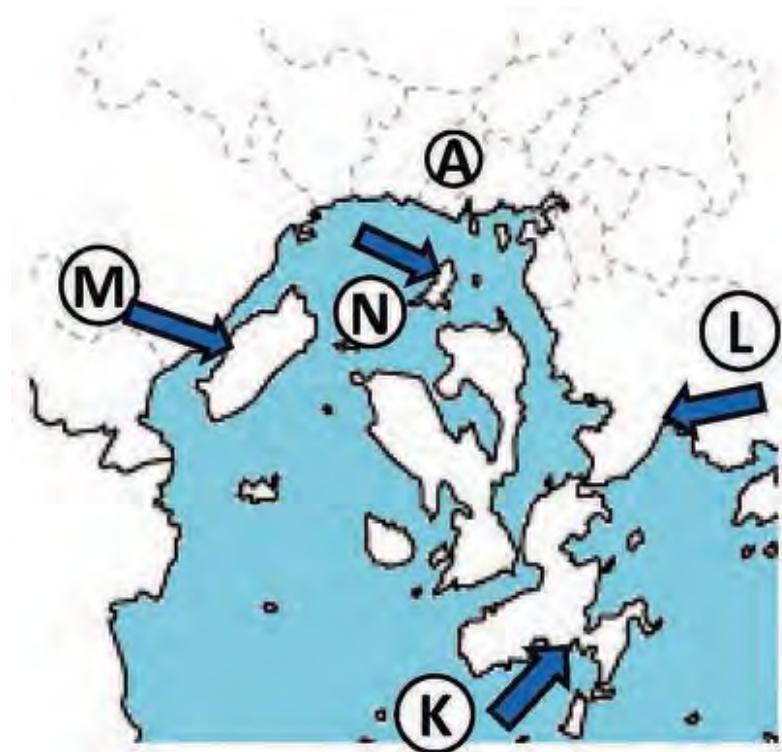
8月6日当日死者数の被爆時年齢別の割合は、男女共に  
被爆時年齢が12歳～14歳（中学1年生および中学2年生）  
で、最も高かったことを示している。



## 1945年の広島



1945年アメリカ軍作成の旧広島市の地図。  
1930年代の大日本帝国陸軍の陸地測量部他の各種刊行物と  
1945年の米軍による航空写真をもとに米国陸軍が作成した地図で  
原爆による被災状況が記載されている。  
赤い斜線（濃い赤）の地域が全壊地域、赤い点（薄い赤）の地域が  
半壊地域。地図の升目は 1000ヤード (914.4メートル) である。  
出典: Perry-Castañeda Library Map Collection, University of Texas Libraries



- Ⓐ 原爆ドーム
- Ⓑ 基町（中国憲兵隊司令部）
- Ⓒ 祇園
- Ⓓ 1945年7月までの田中さんの実家
- Ⓔ 田中さんの実家転居先
- Ⓕ 市役所
- Ⓖ 宇品港
- Ⓗ 今井病院
- Ⓚ 倉橋島
- Ⓛ 吳
- Ⓜ 宮島
- Ⓝ 似島

## 天井の穴の向こうに、青空が

田中穂子

聞き手

齋藤ゆかり、ロレンツォ・バスティーダ

広島の壁面七宝の作家、田中穂子さんがイタリアを訪れたのは、これが四度目。ヨーロッパに何度も足を運び、フランスのリモージュやスペインのラコルニーヤなど、国際的な七宝展に出品、日本国内やアジア、アメリカでと同様、受賞も数多く重ねている彼女だが、過去のイタリア旅行は、いずれも観光が目的だった。もっとも、ヴァティカン市国には、彼女の作品《メッセージ》（1980年、100×84cm）がある。1981年にローマ法王ヨハネス・パウロ2世が 訪日し広島を訪れた際に、当時の広島市長荒木武氏から献上されたものだ。

一方、昨2015年11月中旬の田中さんのトスカーナ・ウンブリア訪問は、アーティストとしてではない。1945年8月6日、6歳10ヶ月だった彼女を直撃した「ピカドン」についてイタリアの老若男女に語るためだ。

広島・長崎の原爆投下から70年の節目に、歴史の検証と核軍縮問題を取り上げるイベントなどがイタリア各地でも相次ぐ中、ピサ大学とピサ市が《ピサはヒロシマ・ナガサキを忘れない》と題して一連のイベントを企画。そのスペシャル・ゲストとして呼ばれ、招聘に協賛した自治体フォリーニョ、ヴィンチ、チェッレート・グイディと、市民がお膳立てしたフィレンツェの5か所で9日間に計10回の講演（聴衆総計1100人以上）と、スピーチ録画も2件行なう、かなり強行なスケジュールをこなした。

以下は、この講演旅行にずっと同行した私たちが、講演と講演の合間や、トスカーナとウンブリアの地を車で移動中に、田中さんから伺ったお話を盛り込み、改めてご本人の協力も得て、証言をインタビュー形式で再構成したものである。



## 語れるようになるまで

YS：今から35年近く前、被爆地広島を訪問したローマ法王に、広島市から贈られたプレゼントは、穂子さんのお作りになった《メッセージ》でした。そこには、どんなメッセージが込められていたのでしょうか？

TT：核開発をテーマに、日本現代工芸展に出品のため制作した作品ですが、広島市長の要請で献上することになりました。

YS: これからお話し頂く被爆体験について、公の場で語られるようになったのは、むしろ最近で、2008年ごろからだとうかがいました。でも、1985年には、ヒロシマの原爆漫画の不朽の名作『はだしのゲン』の英訳本200冊や原爆関係の書籍など計400冊を米ロサンゼルスの被爆者協会を通じて米国各地の学校に寄贈してらっしゃいますよね。被爆証言というかたちこそ取らなくても、やはり「ヒロシマ」の「ピカドン」を身をもって体験した人間としての意識は、つねに持っていましたのではありませんか？

TT: 被爆者までもが核開発を夢のエネルギーと信じ込まされていたことに危機感を感じていたのはたしかです。でも、あの日のことについては、長年、娘、息子にさえ話したことありませんでした。余りに悲惨な体験を話すのは、聞いている相手を悲しませるだけだし、到底理解してもらえるものではない、という思いもあって、とても話す気にはなれなかったのです。何よりも、私自身、できるだけ忘れていたかった。でも、もちろん、忘れることなど不可能で、だから、作家としては、七宝作品のなかに平和への願いを込めて心の傷を癒してきました。50年間、トラウマで正面から向き合う勇気はなかったけれども、時々、何か微妙なシンボルのようなものを忍びませ、それは、見る人にわかってもらえるかどうかは、どうでもよいものでした。

LB: それが、作品でも言葉でもはっきりとメッセージを伝える責任があると考えて、語り部として世界をかけめぐるようになった。それだけの心境に変化が生じた背景には、何があったのでしょうか？

TT: そう、話せるようになったのは、わりに最近、70歳近くになってからです。がんと闘った夫をみとった後、2007年に、寂しさを紛らわせるために非政府組織（NGO）ピースボートの船に乗ったのが転機でした。寄港先の一つ、南米ヴェネズエラのラ・グアイラで、市長のトレドさんに

お会いして、私が広島の被爆者で、だけど、体験を語ったことがないのを知ったその方から、こう言われたんです。「被爆者のあなたが語らず、誰があの日を語るんですか」って。「実際に体験した人が話してくれなければ、あの日、広島で何が起きたのか、わたしたちには判らないし、知られずにいれば、まるで何も起こらなかったことみたいになって、ついには、また同じことがおこるかもしれない。」と。

その指摘がズシンと心に響いて、やはり、子どもたちの世代と同じ思いをさせないためにも話さなきゃいけないんだ、話そう、と心に決めました。

### あの日のこと

LB: 1945年8月6日のあの日、穂子さんは、小学生だったんですよね。どこにいらしたんですか？

TT: 6歳と10ヶ月で小学校一年生でした。朝の8時15分に原爆が投下された時、ちょうど学校に行く途中で・・・。

YS: えっ、8月なのに、登校ですか。夏休みは？

TT: 戦争中ですもの、夏休みどころじゃありませんよ。当時の国民は、月々火水木金々、と言って、夏休みも休日もありませんでした。キノコ雲の下、爆心地から2300メートルの距離にいて、大火傷と放射能を浴びました。

実をいうと、わが家はその6日前に引っ越しをしたんです。たったの6日前まで住んでいたのは、広島市の中心のかつて水主町と呼ばれていた今の加古町でした。今ある平和大橋と万代橋の間、平和記念資料館からもあまり遠くないところで、私は中島国民学校に通っていました。爆心地から500メートルほどのところですから、私のそれまでの小学校のクラスメートあの日そこにいた者は全滅、一人も助かりませんでした。

私も、そのままそこにいたら、骨さえ残らなかったかもしれません。まして、今、こうやってイタリアでみなさんとおしゃべりすることなんて、到底不可能だったでしょう。でも、うちは、旅館を経営していたんですが、建物疎開\*で強制的に、市の東北部に引っ越ししたんです。私も牛田国民学校に転校したという全くの偶然おかげで、辛うじて、命拾いしました。

LB: 2300メートルも離れていても、辛うじて、なんですか？

TT: ええ。引っ越し先は、ぎりぎり焼けなかった地域でした。ちょっと

先は、もうぼうぼう燃えていたんです。もっとも、もう少し遠くても、かやぶきの屋根は発火し焼けたようです。

8時15分は登校途中だったと言いましたが、一緒にいた友達の一人が叫んだんです。「あ、敵機だ！B-29だ！」って。それで、ぱっと空を見上げたら、二機、飛行機が飛んでいて、次の瞬間、写真のストロボを何千も一度に束ねた様な猛烈な光に襲われ、辺りは真っ白になり目が眩み、何も見えなくなりました。

とっさに右腕で顔を覆ったので、頭と、右腕、左後ろ首に火傷をしました。それから、辺りは闇夜のように真っ暗になって、熱い砂埃が舞い上がり、太陽を覆ったんです。それが「きのこ雲」の正体だったのですね。「きのこ雲」というのは、落とした側、高いところにいた人がつけた名前です。それに対して、その下にいた私は、口の中に砂埃がいっぱい入って、じゅりじゅりとした、すごく嫌な感覚を今でも覚えています。

でも、その時には何が起きたのか判らないで、呆然としていました。そのうち、右腕の火傷が大きな水ぶくれになって、猛烈な痛みが襲ってきました。恐ろしくて逃げ惑いながら、やっと家に帰り着くと、家はめちゃめちゃに壊れていました。だけど、その時に破れた屋根から青空が見えたのをはっきり覚えています。それは、その前日とまったく同じ澄んだ青い空だった。だから、今思えば、明日があること、これですべて終わりではないことを、天が子供に示して、励ましてくれたような気がします。火傷が痛くて泣きながらも、子供心にその青色の美しさが深く印象に残って、76歳の今まで、それにずっと元気づけられて来るように感じます。

LB: 『黒い雨』には、当たらなかったのですか？

TT: それが、私のいたところには、降っていないんです。全域に降ったわけではなさそうです。

YS: で、やっと、おうちにたどり着いて、ご家族は？

TT: 幸い母は無事でした。原爆が落ちた時、トイレにいて、爆風で倒れてきた前後の壁が頭の上でぶつかって屋根型の空間をつくってくれたおかげで、無傷なまま助かったそうです。でも、しゃがんだ母のすぐ横を、ジギーと音を立てて、青い熱線がかすめて走り、壁が焦げました。二つ下の妹は、飛んで来たガラスで額に深い切り傷を負っていました。下の妹のほうは生後11か月でしたが、たまたま居合わせた知人の男性が、とっさに傍の布団を被せてくれたので、助かりました。父は戦争に取られて、山口県門司の、軍通信基地に行っていました。一方、当時同居していた二十代の叔母は、その朝、出掛けたきり、遺体さえ戻って来ませんでした。

実は、ここでも偶然が、私たちの運命を大きく左右しました。母は、この朝、市役所に行く予定だったのですけれど、もう一人の叔母が、来る途中で貴重な畑の肥料になる馬糞を見つけて、来るのが遅れたおかげで、出かけられず、壊滅状態になった市役所に行かずに済んだのです。

かくして無事だった母ですが、帰って来た私を見ても、すぐには自分の子だと気づきませんでした。髪の毛は焼け焦げて縮れ、服は破れ、顔や手足は真っ黒。あまりに姿形が変わっていたからです。私はその夜から、高熱が出て、意識不明の重態になりました。しかし医者はみな死に、病院も破壊され、治療が出来ないので、生死は個々の体力と運のみが決めたのです。母は私の死を覚悟したと言っていました。

YS: その日、意識を失うまで、覚えていらっしゃることは？

TT: その夜までの恐ろしい出来事は、今もはっきり覚えています。

まず、大勢の瀕死の人々が、家の前にぞろぞろと列をなして逃げてきたこと。親にはぐれ、生き残った幼い子供も見知らぬ大人の後についてきました。一説に、戦後の広島には原爆で孤児になった子どもたちが数千人以上いたそうですが、その子たちの多くが、親を失ったがゆえに自分たちも戦後の困難の中で命を落としてしまいました。

あの日、私が家の前で見た殆どの人の衣服は焼けて、若い女性も裸同然でした。彼らは両手を前に伸ばして、肩から剥け落ちた自身の腕の皮膚を、爪先にぶら下げていました。両手を前に伸ばしていたのは、心臓より高い位置に上げていると、痛みがいくらか和らぐからだそうですが、まるで幽霊の行列みたいでした。私は今でも、バーベキューのトマトの見ると、一瞬フラッシュバックして、そっとします。トマトは熱に当たると簡単に皮が剥けるけど、人間にも同じことが起こったのです。

それから、不思議なことに、怪我も火傷も見当たらない大人や子供が、バタバタと家の前で、力尽きて死んでゆくのを目撃しました。大量の放射腺を浴びていたのでしょう。でも、当時は、だれも放射能のことなんて知らないし、もちろん、どれだけの放射線を浴びたのか、計ることもない。未だに詳しいことは判っていません。

その夜、大火傷をした2歳の妹を背負って、15歳のお姉さんも来て泊りました。家はめちゃめちゃに壊れていましたが、それでも、母は、すいぶん大勢の逃げてきた人たちをうちに泊めて、助けるのに奔走していました。その姉妹は、無傷に見えた姉がすぐ死に、火傷の妹さんが助かったそうです。お姉さんは致死量の放射線を浴びていたからでしょう。

母が、身を寄せた人たちにカボチャを一切れずつふるまって、その姉妹の妹のほうが「おいちい!!」と叫んだのが、気を失う直前の最後の記憶と

して残っています。

LB: どのぐらいの期間、意識不明だったんですか？

TT: 母が生きているうちに、聞かなかったことを悔やんでいます。3、4日か数日間ぐらいではないかと思います。

YS: 意識が戻って、最初に覚えていらっしゃることは？

TT: 腐った死体を焼く、生焼きの異臭。魚の腐ったような猛烈な臭い。ほんの一瞬の間に、たった一発の爆弾で、都市が消滅して、14、5万人もの市民が亡くなってしまったんですね。長崎では、7万人以上だと言われています。戦後何年もたってからも、たとえば、中学校の校庭で、掘り出された骸骨を目にして気分が悪くなるような経験は、広島の人はみんなしています。

さっき、家族は同居していた叔母を除き、命は助かったと言いましたが、身の回りに犠牲になった人々は大勢います。たとえば、母の従兄弟の一人は、バケツにまるでユデダコのような人間の焼けた頭蓋骨を入れて持っていました。遺体の主は、倒れた家の下敷きになって抜け出せない所を、迫って来た火に生きたまま焼かれて、残酷な死を迎へたらしかった。「彼のお母さんの遺体」だと私は聞いた記憶がありますが、当時の彼は叔母さんと二人で住んでいて、その人の遺体だと最近になって知りました。正確な被爆状況の検証はまだまだ必要で、被爆者が生きているうちにする必要があると痛感しています。

また、のちに結婚する夫の親戚では、キリスト教徒で美しい絵も描く、平和な心の持ち主の英語教師をしていた叔父の一家が、赤ん坊を含めて6人全員、原爆に殺されました。

広島の収容所にいた捕虜の若いアメリカ兵たち12人も自国の核兵器で全員死んだことは、ご存じでしょう？

LB: はい。でも、幸い稔子さんは助かって、数日後に意識を取り戻して、それからは順調に快復なさったんですか？

TT: そうですね。なにしろ、病院は破壊され医師も死んでいるので、火傷については、母がきゅうりのスライスを患部に貼るなど、もっぱら民間療法に頼っていました。一ヶ月以上経ってから、一度だけ巡回診察が学校の校庭でありましたが、包帯を巻いてくれただけで、薬もないありさまでした。完治するのに一年はかかりますね。

それでも、火傷の痕は年月とともにだんだん薄くなっていたのに対し、

十代の中学に進学する頃になって、今度は、放射能の影響と思しき健康障害が始めました。白血球の数値異常と診断されて、微熱と耐えがたい疲労感があり、しょっちゅう気分が悪くなって倒れました。口内炎や唇周りの吹き出物が年中絶えないで、ご飯を飲み込むのも一苦労でした。

### 放射能障害－時限爆弾とともに生きるヒバクシャ

LB: ああ、あの有名なおりづるのサダコ、佐々木禎子さんみたいにですか？

TT: そう。彼女は私より4歳年下で、私と同じ幟町中学校の生徒だったんですよ。彼女が入って来た時には、私はすでに卒業していましたが、同じ先生に教わった縁があります。彼女は、2歳で被曝し、12歳で白血病が出て亡くなりました。「サダコ」は世界中に有名になったけれど、広島にはサダコのような子どもたちが大勢いて、白血病で亡くなっていること、彼女は、そのシンボル的存在であることを忘れないでくださいね。

私の放射線障害はその後も続き、今でも疲れると帯状疱疹が出て、痛くて夜も眠れないことがあります。大腸からの原因不明の出血もあります。若い時から何度も骨折したし、膝の手術、また眼の白内障の手術などもしました。医学的にも法的にも原爆のせいだと認定はしてもらえませんが。

YS: でも、穂子さんは、被爆者手帳をお持ちですよね。

インターネットで調べたところによると、被爆者手帳、正式名を被爆者健康手帳というのは、広島あるいは長崎で直接、間接に被爆した人たちに交付される手帳で、医療費支援を受けるためのもの。申請できるのは、原子爆弾投下の際、一定区域内にいたか、入市被爆者、投下後二週間以内に爆心地から概ね2km圏内に入った人。三番目のカテゴリーは、救護施設などで10人以上（1日当たり）の被爆した方の救護や死体処理などに直接従事した人、または当時の市域を結ぶ線内の海上で被爆した人。そして、最後が、これら各項に該当する人の胎児で、長崎では昭和21年6月3日まで、広島では昭和21年5月31日までに生まれた人、だそうです。

受けられる援助は、医療特別手当・特別手当・原子爆弾小頭症手当・健康管理手当・保険手当・介護手当（費用介護手当・家族介護手当）・葬祭料などの手当。また、指定医療機関・一般疾病医療機関での治療について、本手帳などを提示することで全額国費で、あるいは自己負担分を負担しないで受けることが出来る、とのこと。

ですが、被爆者の実態には必ずしも即しておらず、かなり杓子定規で理不尽な判断に基づく、差別的な制度だと聞いています。

TT: ええ。2・3キロで受けた私は、火傷もしていますので、第1種ヒバクシャとして認定されています。被爆者手帳も交付され、持っていますし、医療費も国民健康保険と半々で負担して貰っています。でも、いざ病気に掛かった場合、2キロ以内で被爆した人は、白内障や癌等、「原爆症」と認定されて月13万円位の医療費が出ますが、それより離れて被爆した私達は「原爆との因果関係は無い」ことにされてしまうんです。変でしょう？

これについては、裁判を起こす人たちもいて、長い苦しい法廷闘争の後に勝訴しました。ただ、私自身は、裁判で医療費を勝ち取ることにエネルギーを注ぐよりも、今、ヒバクシャとしてやるべきことが自分にはあるように感じるんですよね。

### 次世代に継承される苦しみ

TT: しかし、大人になった被爆者にとっての一番の心配は、やはり自分のことよりも被爆二世である子供達の健康に関する問題です。

私は25歳で結婚し、幸せな家庭を持ちました。主人は私がヒバクシャである事に全く拘泥していない様に見えました。しかし、最初の子供が生まれた時、実は内心「障害児」が生まれることをずっと恐れていたのを知りました。真っ先に、赤ん坊の手足の指がちゃんとそろっているか調べたのです。

その頃、ヒバクシャに奇形の子供が生まれるとの噂が拡がり、親は皆心配していたからです。一方、その後生まれた息子のほうは、先天的に漏斗胸という、胸部の骨に少し形状異常があります。医師は原爆との関係を認めませんが、それが原因で小学4年の時にいじめを受け、親として、自身の被爆が原因ではないかと悩みました。

二世への影響については、現在も充分に解明されておらず、医師も証明できないようですが、親は自らの被曝を申し訳ないと思い、精神的にも子供とともに、一生重荷を背負い苦しむこととなります。被爆前の私達一族は、両親共にとても健康でした。しかし被曝二世にはその後、多くの病気が出ました。被曝した妹の娘は、22歳で甲状腺がんの手術をしましたし、他の二人の娘もやはり、甲状腺を患っています。また、被曝二世の弟は、若くして大腸がんの手術をしています。医師に因果関係の立証は出来なくても、周囲の病気の多さから、ヒバクシャは、「確率的影響」として、原爆の影響を実感しています。

これらの放射能の影響が、核兵器の普通の兵器とは異なる最大の点です。

そして、同じことは、2011年3月11日に起きた福島第一原発の事故についても言えるでしょう。日本はあろうとか、ヒロシマ・ナガサキの

原爆にも、第五福竜丸にも、そして、切尔ノブイリにも学ぶことなく、自らの国で放射線物質を放ちヒバクシャを作つて、福島市民から住む場所を奪い、国民から安全な水や食料を奪っています。福島の方々は、日々目に見えない放射線と戦つて子供の未来を心配しています。これは親子ともに、精神的にも非常に辛いことなのが、私には身に染みてわかります。広島市民として、福島市民に心から同情せすにはいられません。

否、それどころか、被爆者の一人として、忸怩たる思いがあります。

福島の原発事故後、被爆証言をする先々で、よく聞かれるのは、「日本は核兵器で酷い目に遭ったのに、なぜ、あんなに多くの原発を造ったのか」という質問なんですね。

正直なところ、この問い合わせについては、答えに詰まってしまいます。言い訳をすれば、「平和利用」の名のもと、政治や経済活動のための「安全神話」を為政者も一般市民も信じようとしたからです。多くの被爆者は、おそらく、心中では不安を抱きながら、あるいは不本意なかたちで賛成したのではないかと思います。

YS: そう言えば、《アトムス・フォー・ピース》の名のもとに始まった原発の世界的な売り込みで、日本にも原発が導入されることが決まった時、最初の建設候補地になったのは、なんと、広島だったんですね。

TT: そのとおり。アメリカは、核にとりわけ強い反感を抱く広島を、最初の原子力発電所誘致候補地に選んだのです。そして、1956年の5月から6月にかけて、原爆資料館で、「夢の原子力展」という平和利用、つまり原発の博覧会を開き、子どもたちを団体で見学させました。「核兵器で酷い目に遭つたから、今度は、安全な核の平和利用で発展しよう」と大々的に宣伝されたので、科学的な知識のない市民は、それを鵜呑みにしてしまいました。私自身は、当時広島を離れ、東京の文化服装学院に行っていましたので会場は観ていませんが、6歳年下の妹は中学生で、学校から教師引率のもと、「夢のエネルギー」展を見学したそうです。

YS: 彼らは、広島市民さえ説得できれば、日本の全国、どこでも原発が造れるようになるだろう、と踏んだ。そして、実際に、その目論みどおりになったわけですね。

TT: ええ。結局、原発は、広島ではなくて、日本列島の過疎地に次々と建設されましたが、被爆者としては、大変な不勉強と無自覚を反省せざるを得ません。

LB: ほかに、証言活動のなかで、よく受ける質問には、どんなものがありますか？

TT: あれだけ悲惨な目に遭つたのに、なぜ、復讐ではなく、平和を願うのか、とよく訊かれます。みんな、不思議に思うようですね。

原爆に肉親を殺されて、自身も地獄を見たヒバクシャが、怒らないはずはありません。連合軍による占領が始まった時期、アメリカ兵と刺し違えて死ぬつもりで、銃刀を隠し持っていた人もいたようです。私自身を含め、子どもたちは、戦争中、欧米人は鬼畜だと教わったので、人間ではない鬼、非情な化け物のアメリカ人が怖かったし、被爆直後は憎しみで許せませんでした。

ところが、実際に進駐して来たアメリカやオーストラリアの兵隊たちは、鬼じゃなくて、同じ人間だった。むしろ、私たちにやさしくて、日本の軍時政権下に比べれば、遙かに民主的に感じられました。

そもそも、戦争直後の日本国民は、深刻な飢餓に苦しんでいました。何とか、生きのびること。それが、差し迫った最大の課題であり、できる精一杯のことだったんです。怒りも復讐も、生存が何とか可能で余裕がある時に生まれる感情なのではないかしら。親を失い闇市のごみを漁って食べた数千人の孤児たちにしてみれば、進駐軍放出の粉ミルクが救いに思われておかしくないでしょう。

でも、復讐を叫ぶ気になれない最大の理由は、やはり、原爆の威力が、人間の想像をはるかに超えていたことかもしれません。その前では、人間は無力感に苛まれるだけです。怒りと復讐の行きつく先は、戦争と破壊だけ。もう、それは、たくさんです。

「敵」や「鬼畜」だった存在が、同じ人間であることがわかってから、だんだん、悪いのは、人としての彼ら自身じゃなくて、政治やメカニズム、仕組みのほうなんだと考えるように変わっていった気がします。つまり、時の政治が悪ければ、普通の人間が戦争に追い立てられていき、善人同士でも殺し合うようになってしまうのです。

では、どうすれば、そういう憎悪や復讐の連鎖を遮断することができるか。

それには、秘訣があります。

世界中に、民族や国籍を越えて親しい友人をつくること。

将来、もし国家間で問題が起こった場合、友人の顔が見える国と、経済や霸権の為に戦争をし、爆弾を落とす気持ちには、簡単にはなれないでしょう。その躊躇する気持ちが、市民にも為政者にも極めて大切だと思うのです。

私には、今、大切な友人が二人います。原爆投下の命令をした、アメリ

力の大統領、トルーマンの孫、クリフトン・トルーマンさんと、原爆を投下した爆撃機、エノラゲイに乗っていた、ジェイコブ・ビーザーの孫、アリ君です。何と彼らは今、熱心に平和活動をしています。二人は広島の和平式典に参列し、ピースボートに2回も乗船して、世界に平和を訴えました。アリ君は広島に住んで、原爆資料館の案内役もしました。

だから、特に若い人たちには、今たくさんあるツールも活用して、世界中に友だちをつくってほしいと思います。

YS + LB: 国よりも、人間、個人との繋がりなんですね。

TT: ええ。実際、孫のクリフトンさんから訊いたところによると、トルーマン大統領は、原爆投下命令を出した時まで、一度も生身の日本人に会ったことがなかったそうです。

直接知り合い、語り合って、友だちとなることで国を超えるのが、いかに大切なことは、被爆の証言活動を通じて実感させられていることです。顔が思い浮かぶ友人の上に核兵器を落とせるか。甘い考えだと思われるかもしれないけれど、私には、核兵器や戦争を拒む力になり得るという、素朴ながら強い実感があります。

LB: 被爆者同士で体験談を語り合う機会というのはあるんですか？

TT: 残念ながら、あまりありません。なぜかと言うと、みんな、どうしても自分の体験が一番ひどかったという思いがあって、あまり他の人と情報を照らし合わせたり共有したりしたがらないみたいです。

でも、私自身は、たとえば、一緒に証言する機会があった笹森恵子さんとお話して色々発見した経験があります。

笹森さんは、爆心地からほぼ100パーセントが死亡したとされる1、5キロ圏内で被爆して、顔や胸、腕、手、首に重傷を負い、体の25パーセント以上に熱傷を受けたのに、奇跡的な生還を果たした方です。私が「体のほんの一部を火傷しただけの私があんなに痛かったんだもの、あなたはさぞお辛かったでしょうね」と言ったら、「いや、それが全然痛くなかったの」っておっしゃるの。なぜなら、神経をやられちゃっているから、感じなかたんですね。

### 生き残った者の責任、生かされている者の使命

YS: 最初のお話にちょっと立ち戻って、うかがいたいのですが、七宝芸術の作家として、作品の中に平和への願いを込め、50年間、トラウマの

心の傷をいやしてきたとおっしゃいました。そして、見る人に理解できなくて、時々、シンボルのようなものをこっそり忍び込ませた、と。それを、芸術活動のなかに、生きる勇気を見出した、セラピー作用があった、というふうにとらえることは可能でしょうか。

TT: はい、可能だと思います。アートは、言葉を介さずにまずハートに響くもの。私は大した芸術家ではないけれど、人の作品をみるとその人のすべてがわかる、多分、それまでの人生までが伝わってくるんです。それは、相手を認めることにもつながるので、答えはイエスですね。破壊を直視した中で、そのなかに救いがあったということ。私の場合、作品をつくるのは、普通の感覚の美しさやバランスだけでは、完成しないんです。そこに人にはわからない形でも、メッセージを入れないと作品が完成しない。それを繰り返すことによって、自分の中で経験を直視できるようになってきたように思います。

LB: 証言活動についてはどうですか？ 辛い行為ですか、それともセラピー効果がありますか？

TT: 私の場合は、やはり話すことが、話せずに死んだ人の供養になっているんだと考え、その思いがセラピーになっているような気がします。最初は、原爆を話して自分が注目されることが、とても嫌でした。今でも、サインを求められるのは、正直なところ、苦手です。でも、平和のために集まってくれた人に、邪険な対応はできないので、平和のためにやるんだと考えることにしています。

被爆証言をすることで自分が癒されていると感じたのは、原爆による大きな火傷が原因で結婚できなかった同級生のことを知った時です。彼女は精神病院で寂しい老後を送っていて、語らぬ被爆者たちの心の傷がいかに深刻なものであるかは、想像するに余りあります。

話すことが世界のためになると思えること、何かの役に立っているんだと考えられることが、まさにその心の傷から少しずつ立ち直るのを可能にしているのかもしれません。

でも、それは、証言活動の結果であって、動機ではありません。

動機は、やはり、証言が、生き残った者に与えられた使命だと感じるからです。

わたしが生き残ったのは、原爆投下のわずか六日前に引っ越したからだ、とお話しでしょう？ 本当に偶然なんですよ。いい人、優秀な人であっても死ぬこともあるし、生き残ったのは、それだけ能力があった証しでも何でもないんです。私たちは生き残ったというよりも、むしろ、私は「生

かされている」と感じています。

それは、原爆に限ったことではありません。私の実家は、引っ越しまで旅館をしていたと言いましたが、軍用旅館だったんです。広島の宇品港から前線に出陣する前夜に泊まる場所だったの。東北地方からも大勢の兵隊さんたちが立ち寄って、私は、彼らが最後に見た日本の小さな女の子だったのでないかしら。出発した12万人中、生きて戻って来たのは、4万人だけで、戻ってこられなかった人たちの多くは、餓死したんです。

つまり、生き延びる運命にあった以上は、亡くなってしまった方たちの魂の分まで、《伝える》使命を帯びているんだと思います。彼らの声を将来の世代に伝えること。証言しようと決心して8年目になる今でも、それは、私にとって決して楽なことではありません。でも、将来にわたって、色々な国の人々の平和につながるのだと思えば、慰めにはなります。

## 「花の季節」

堀場清子

だれが書いたのか  
「安らかに眠ってください」などと

どうしてねむれよう  
剥げおちた皮膚の痛みも去らないのに

命が内から崩れてくる  
苦悶がいまも 火となって駆けるのに

また夏がきて  
夾竹桃が 咲く

あの日の紅さに 死者たちが目をみひらく  
生者たちは目をそむける

赤い花芯のひとつひとつに  
死者の目を点火せよ

風にゆれる すべての花のしたに  
わたしたちの怯懦を晒せ

……恥ずかしくないのか わたしたち  
犠牲の上に生きのびて  
平和をしかと 手に掴んだか

長年月を わたしたち  
あまりに無力で はなればなれで……

だが まさにいま  
生きていて 生命への愛を語る  
このささやかな営みが  
殺意と憎しみを融かしつくすその日まで

ヒロシマの靈よ  
眠るな

## 伝えられなかったヒロシマ・ナガサキ

堀場清子

### 記憶の中の「ピカドン」

1944年の夏から母、弟とともに縁故疎開していた私は、当時、14歳。広島市北郊、いまは市内の安佐郡緑井村で病院長をしていた祖父の医師用住宅で暮らしていた。その年の暮れに肺浸潤の診断を受けて女学校を休んでいたので、あの朝は、弟と従弟が勤労奉仕で緑井国民学校へ登校した後も、母や叔母たちとまだ朝食の卓を囲んでいた。

突然、あたりいちめんに、電灯のような黄色っぽい光が、閃いた。

私たちのいた緑井の家は、爆心地から北へ約9キロ、しかも茶の間は北西向きだったから、広島の人たちが「ピカドン」という、その「ピカ」も、間接的にしか見なかった。それでも経験ない、不可思議な閃光だった。

南向きの縁側に走り出でみると、広島市上空にあたる南の空いっぱいに、ピンク、紅、空色、紫、濃淡の五色の雲が、激しい勢いで湧きかえっていた。地獄とは、来迎図の外貌で訪れるものなのか、あの雲の下にいた人々を思えば痛ましくも、それは巨大な雲の花が際限もなく地から湧き、咲き盛る美しさだった。私は思わず叫んだ。

「あれなに？」

赤ちゃんだった従弟を抱いた母を最後に、全員が縁側で顔を並べた瞬間、「ドン」がきた。もっとも、私には音を聞いた記憶はない。ただ猛烈な衝撃が吹きつけて、とっさに節子叔母が赤ちゃん用に敷いてあった蒲団を曳いてきて、その下へ夢中でもぐりこんだ。一枚の掛け布団の中で、大小五人が揉みあっていたが、いつまでたっても、次の「ドン」は来ない。

おそるおそる顔を出してみると、閉めてあった部分のガラス戸は、めちゃくちゃに砕け、障子は桟ごと吹き飛び、天井は、北の角が5センチぐらい吹き上げられていた。北向きの玄関の二枚の引き戸も、鍵の掛かったままV字型に鶴井から外れて、爆風が逃げ道を作っていた。

やがて祖父の病院から連絡があり、母と私は手伝いに向かった。歩いて3分ほどの距離だが、途中、母が「あ、あれ！」と右上方を指した。阿武山（約600メートル）の上を真っ白いパラシュートが3つ\*、斜め等間に並んで滑るように北へ流れていく。その白さが、一点の雲もなく晴れ

渡った空の青さを、いっそう濃く感じさせた。

北の空のパラシュートに気を取られたまま、私たちは歩いていった。あのとき南の空を振りかえれば、キノコ雲を見たに違いない。もっとも、原爆など知らず、原爆とキノコ雲を結びつける概念も、まだ存在していなかったけれど。

病院には、負傷者を乗せた最初のトラックがつき、祖父が外科室で手術にあたっていた。看護婦さんたちの白衣の忙しい動きが、すりガラスごしに見え、控えの処置室に一歩入ると、むっとくる血の匂いで息が詰まった。処置台や椅子にひしめく男たちは、20人あまり。市の北辺にいて、ガラスで裂傷を負い、鮮血が白いシャツを袈裟がけに染めていた。

二台目のトラックからが、原子の火に焼かれた人々だった。

帽子をかぶった男たちは、線を引いたように、帽子におおわれた部分だけ頭髪が残り、下側はするりと剥げていた。大きくはれ上がった真ん丸な白い顔に、黒い汚れが下がっていると見て、近づけば黒く縮れたものが皮膚の名残り、白いのは脂肪層とわかるのだった。声帯も腫れたらしく、男も笛を吹くように甲高い声を出した。

祖父の残した「思い出の記」には、「祇園救護所では『重症患者は今井病院へ』との標語の下に頻りにトラック輸送を開始した」とあるから、重傷者が集中したのかもしれない。平時なら自力で歩けるはずのない重傷者が、ひきもきらズ国道を歩いて逃げて来た。母と私は、門前で受付にあたった。誰もが折目正しく、姓名と住所を告げ、その後へきまつて付け加えた。「直撃弾を受けました」。町名も方角も違う人々が、みんな「直撃弾」とは不可解だった。

このときすでに60歳を過ぎていた祖父は、6日朝から、「昼食夕食も抜き、徹宵一睡もせずの大活動でも処置し尽せなかった。翌7日も大同小異」（「思い出の記」）。助手の医師も、レントゲン技師も、とうに招集され、6月には最後の招集があって、院長を継ぐ伯父までが、白髪の目立つ禿姿で軍医として入営した後だった。看護婦6人、付添婦3人と、祖父は手記中に「戦力“を数えているが、とにかく男手がなかった。メスを持つ手は祖父一人きり、治療の順番より、死の順番が先に来てしまうのを防ぎようもなかった。

私は手術の現場を一度も覗いていない。外科室のすりガラスの向こう側が、祖父と看護婦さんたちの持場、こちら側が、大家族のうち、乳飲子を

抱えていなかった女たちの、下働きの場だった。と言っても、押しかける重傷者への対応だけで、きりきり舞いし、具体的には何をしていたか、はっきりと思い出せない。私がたまたま薬局にいたとき、麦藁帽子の少女が窓にきて、縋るように言った。

「父さんが、治療を受けて帰りましたが、高熱を出して苦しみります。先生に往診してもらわれんでしょうか」

それは夢のような希望だった。まだ最初の治療を受けられない負傷者が、ばたばたと死んでゆくなかで、彼女自身百も承知のその事実を盾に、断るよりなかった。その段階で高熱を発した例は、おおかた希望がもてないのであった。少女は窓の鉄格子にしがみついた。

「では、せめて薬をください！　せめて、熱さましでも・・・」

目の前の棚に薬瓶は並んでいたが、私にはどれが熱さましか解らない。看護婦さんを捉まえようと試みるもうまくいかず、一縷の希望を断ち切る役を果たすしかなかった。

半世紀以上たった今も、あの少女は度々私を訪ねてきて、鉄格子を握っては泣き沈む。せめて私が、毒にならない薬を知っていたら、どんなに良かったか。メリケン粉でも砂糖でも、当時の貴重品の一掬いが裁量できたら、どんなに良かっただろう。知らぬふりで薬包みにして渡せば、死にゆく父・夫に、せめて熱さましは飲ませたと、家族の心情はのちのちまで、どれほどか救われたことだろうに。

「新型爆弾」の噂が流れてきたのは、7日の夕方ごろだった。あの時の、ゾッと身の毛のよだつ感覚が、忘れない。「原子爆弾」という呼び名を、いつ聞いたかは、記憶がない。ピカッときて、ドンで一切が壊滅したのだから、広島のにんげんにはあくまで「ピカドン」で、「原子爆弾」はよそよそしい言葉だった。

後年、叔母がいった。「最初のトラックに、なぜか、無傷の男の子が一人まじっていたのよね。10歳ぐらいの。その子が、着いてから間もなく、狂いまわるようにして死んでしまった。その時、お祖父ちゃんが、これは新型爆弾じゃの、っていわれたのよ。さすがだなアと思ってね」

母や叔母たちと話し合ってみると、同じ場所、同じ状況の中にいながら、体験や記憶がそれぞれに違っている。まるで各自が、ジグソーパズルの別々の一片を抱えこんでいるように。それほど、どの局面も切羽詰まり、混乱を極めていた。

あの時、引き受けた負傷者は、いったい何人だったかと、後になって私たちは話し合ったが、これも意見はばらばらだった。『広島原爆戦災誌』第四巻第二編（広島市役所、1971年）によると、今井病院の収容者数が300人、死体処理数80人、とある。その後一ヶ月間に祖父が处置した被災者の延べ人数は、3千人にも達しただろう。死亡診断書の写しには、その間の死者は155人とある。

「ピカ」から3日目の夜、久しぶりの想いで、家に帰って食事をした。その時はじめて、自分の手が異臭を放っているのに気がついた。ただの死体の匂いとも違う。核分裂によって、生きながら内部崩壊させられた生物の、独特の腐臭だった。原子爆弾が、地球上に新しく生み出した、耐え難い悪の匂いだった。

そんな混乱のうちに、8月15日の敗戦がきた。その前日、一族の大人子ども、総勢12人が車を引いて山へ焚木を取りに行った。見晴らしのきく一本松で、私たちは息をのんだ。見えるはずのない広島湾が青く輝き、似島が、安芸の小富士の別名にふさわしく、愛らしい三角形をやや傾かせていた。私たちと似島の間には、なんにも無かった。かつて視界を妨げていた、ひとつの都市、軒の暗い古い店々が並んだ本通りや、・・・いっさいがっさい、魔法にかかったように消え失せて、ただの平べったい拡がりに変わっていた。

その焼け跡から農村地帯まで、一面に林立しているものがあった。林のように数もそれず、薄青い細い煙が、まっすぐに高く、高くのぼって、天へと溶け入っていた。人を焼く煙だった。11月はじめまでの死者「13万人前後」とされる、大量の死体処理には、河原に穴を掘り並べて焼くしかなかった。この夏の日々、魚を焼くような匂いが、いつも空気と混じりあっていた。生き残った人々は、苦く頷きあうのだった。「人間も魚も、同じことよのオ」

当時の広島市は建物疎開の真っ最中で、周辺の農村も勤労奉仕を強制され、一戸から一人は出ねばならなかった。投下前日の8月5日は緑井の番で、母と病院の伯母が解体された県庁庁舎の後片付けを行った。爆心から南西へ800メートルほどの地点である。6日はより爆心地に近い中島新町で、隣村の191人が作業に就いた。本来は6日が緑井の番だったのを、その村の都合で交替したと聞く。結局、全員が亡くなり、一挙に75人の女性が夫を失って、「原爆未亡人村」の呼び名まで生まれた。

そして忘れもしない9月17日、のちに「枕崎台風」と呼ばれる猛烈な暴風雨が襲って、半壊の家々を倒し、山津波が大野陸軍病院もろとも、京都帝国大学の原子爆弾災害総合研究調査班を呑み、洪水は焼跡も農村地帯もひとつづきの大湖水に化して、温品村に疎開した中国新聞社のたった一台の輪転機を水浸しとし、河原で焼かれた骨々や灰までを、残留放射能とともに一挙に海へと押し流したのだった。占領軍は、その後で放射能を測定し、それをもって被爆線量とした。<sup>1</sup>

### 「ヒロシマ」を語る

戦争は終わっても、厳しい食糧難に喘ぐ日々が続くなか、翌1946年の2月に私たちは、奇跡的に焼け残った東京の家へ戻った。そして、占領軍の支配下で、『自由と民主主義』の時代が始まった。なにかのはずみで友人たちに原爆体験を語ると、みんな目を瞠って驚くのだった。戦時下の言論弾圧につづく、占領軍の検閲下で、原爆の実態はそれほど日本人に知られていなかった。誰もがひどくショックを受けた状態になって、終りには呻くように、必ず同じ言葉を口にした。「君は…そのことを、きちんと書いておくべきだ」

たしかに、あとで触れる『雅子艶れす』の著者のように、私と同じ十代の半ばでも、その時点で優れた体験記を書いた人がいる。しかし、私は才とぼしく、しかも体験が直接的でなく、描くべき惨禍の巨大さに比して、表現の修練は皆無だった。散文よりも詩に書き留めたいと思いながら、自分の無力さを意識しつつ年月がすぎた。

広島の「壊滅地帯」にあった進徳高女の教師、衣川舜子(1913-95)は、『夏の花』などで有名な原民喜(1905-1951)と同じ幟町の自宅で被爆、自身も負傷しながら、救護所へ瀕死の生徒を捜し歩き、重症の原爆症となった。自らの体験記『ひろしま—原子爆弾の体験をめぐりて』(丁子屋書店、1949年7月)を、原爆の実態を知ってほしいと、書留郵便で直接マッカーサーあてに贈呈した勇気ある女性だ。それはしがきには、こうある。「ふたたびこの地球上にこのようなあさましい実験が繰りかえされぬことを、切に祈るものである。願わくは体験者全部が、何等かのかたちで記録をのこされたらよいと思う」。

<sup>1</sup> 矢ヶ崎克馬氏の『原発と人間』による。氏は、この操作を〈科学的粉飾〉の第一号と位置づけ、ここから核、原発、放射能の安全神話が発展したとしている。

これらの想いは、あの惨禍に遭遇した、文筆に関心ある人々すべてに共通の心情と思われる。

歴史的な惨禍をまのあたりにし、しかも生き残れば、大勢の死者から重いものを託される。

私がささやかな原爆の詩、6篇を含め、丸木俊子氏に題字と見返しの絵を頂いて、ようやく詩集『空』(冬至書房)を纏めたのは、1962年だった。そして反響もなかったが、仲間の女性詩人から思いがけない言葉をきいた。

「あなたは、被爆者じゃないから、原爆の詩を書いてもだめなのね」。

そのうち、「被爆者でもないのに、原爆の詩を書く資格があるのか」といった声も伝わってきた。

またある評論家が原爆の詩を紹介して、私の作品も好意的に取り上げてくれたのだが、その中に「特権的」という言葉があった。自分は負傷せず、他人の悲惨を間近に見たことを指すらしかったが、その三文字を眺めながら、つくづく、考えこんでしまった。あれは「特権」というものだったのか、と。

それらは、被爆者から発せられた言葉ではなかった。が、原爆にかかる表現に関して、被爆者でない詩人たちの間にさえ、一種の〈閉出しの力学〉が働いていると、感じさせるには充分だった。原爆の真実を描くことを使命とした作家大田洋子は、原爆の火傷で指の癒着した女性が、市電の中で車掌に切符を渡す困難さを描写したが、文壇はそれを「こしらえもの」と嘲って、急性原爆症の恐怖と闘いながら彼女が書いた連作を、〈原爆もの〉しか書けないとして貶めた。

私はその後も、原爆の思い出を書けと求められて、断ったことはない。しかし、地球上の生物の運命を決するこの主題について、学び、自己を深めてゆく道から、愚かにも、このとき撤退してしまった。

### 《プラング文庫》

そんな私をふたたび原爆に結びつけたのは、《プラング文庫》との出会いだった。

が、その前に、イタリアの読者のためには、第二次世界大戦直後の日本の状況について若干の説明が必要だろう。

広島、長崎への原爆投下から間もない8月14日、連合軍による「日本

の降伏要求の最終宣言（Proclamation Defining Terms for Japanese Surrender）」、通称ポツダム宣言の受諾の意向を伝えた日本は、翌15日の正午、ラジオによる玉音放送で国民に敗戦を報じた。9月2日、横須賀沖のアメリカ戦艦ミズーリ号上で降伏文書の調印式が行われるのに先立ち、8月30日には、連合軍最高司令官ダグラス・マッカーサー元帥がマニラから沖縄経由で神奈川県厚木市の海軍航空隊基地に到着。このときから、サンフランシスコ条約発効の1952年4月28日までが、事実上の占領時代だった。大戦中、連合国軍はドイツの場合と同様、米英ソ中国による日本本土の分割直接統治を計画していたが、最終案で日本政府を通じた間接統治の方針に変更され、地上戦を経てすでにアメリカの占領統治下に置かれていた沖縄を除く日本は、主権の一部を制限されつつも政府が存続する間接統治の占領下に入った。

日本の戦後《民主主義の時代》は、占領軍による《検閲の時代》でもあった。進駐当初から約4年間、占領軍は、電信電話・郵便などの通信手段、マスコミ、ミニコミのあらゆるメディアにわたって、徹底的な検閲制度を施した。言論を統制すると同時に、全国から情報を吸いあげ、効率的なシステムによって、必要な情報を占領軍内にゆき渡らせ、日本人の生活・思想・活動を、正確に把握していたと思われる。

この大事業を任務としたのが、1945年1月1日にフィリピンのレイテ島で正式設立された CCD (Civil Censorship Detachment) だった。その窓口になる検閲局は、第一地区では東京に、第二地区では大阪に、第三地区では福岡に置かれた。第四地区は、占領初期、ソウルにあったものが、やがて札幌に移されて、全国を四地区に区分することになった。

新聞の事前検閲は、9月8日から東京5紙で開始され、10月には大阪7紙、翌年5月に札幌へ波及。メディアを震撼させた最初の衝撃は、9月14日から15日にかけて走った。同盟通信社が、さらに18日から20日にかけて東京朝日新聞が配信・発行停止の命令を受けたのだ。後者の発行停止の理由のひとつは、鳩山一郎<sup>2</sup>が15日の紙上で原子爆弾の使用を「国際法違反、戦争犯罪」と語った点だった。

9月19日、検閲政策のバックボーンとなる十カ条の「日本新聞紙法」

<sup>2</sup> (1883-1959) 東京出身の保守主義的政治家。1915年から国会議員。1954年から56年まで3期にわたり内閣総理大臣。2009年から2010年にかけて民主党政権の総理大臣を務めた由紀夫はその孫。

(Press Code for Japan)がSCAP（連合軍最高司令官総司令部）から発令、21日に公布された。CCDが同日発表したやはり十カ条の「日本出版法」(Code for Japan Press)は、ほぼ同内容で、それを運用したCCD自身、「プレスコード」を通称に使っている。「日本出版法」の十カ条は、以下の通り。

- 一、報導は、厳重に真実に基づかねばならない。
- 二、直接にせよ、間接にせよ、公安を妨ぐるやうな記事を掲載してはならない。
- 三、連合国に就いての虚偽又は破壊的批評を掲載してはならない。
- 四、連合国占領軍に就いて破壊的批評や、占領軍に対して不信、又は怨恨を招くやうな記事を掲載してはならない。
- 五、公式に発表されない限り、連合国軍隊の動静を掲載してはならない。
- 六、報導記事は事実を記し、記者の意見は少しも加えてはならない。
- 七、報導記事は宣伝価値を持たせる様に色づけてはならない。
- 八、まして重要な報導記事を誇張したり、宣伝的意味をつけたりしてはならない。
- 九、報導記事は関係ある事実又は詳報を省略して、歪める様なことをしてはいけない。
- 十、新聞編輯に当つて、宣伝のためにする目的をもつて必要以上に重要性を報導記事に附与してはならない。

雑誌の事前検閲は、9月19日に東京からはじまり、11月には福岡、翌年2月には大阪に及んだとされる。雑誌の場合は、一部の作品が発禁となつても、それを差し替えて再提出し、最終的にパスすれば発行できた。原爆作品にも、その他にも検閲者の赤エンピツで無慙に消され、バツ印や「発禁」の文字で覆われた事例がたくさんある。1949年10月末日の深夜に、CCDが検閲作戦を終えるまでの約四年間、当時の言論界を主導していた総合雑誌、検閲局のいわゆる「極右極左28誌」は、一貫して事前検閲に留められた。

また、本の検閲は、1945年10月21日に東京地域で開始され、次第に他地域へ及んだ。1947年10月15日までに「極右極左」14社を除くすべての出版社が、事後検閲に移行したが、それら14社は1948年9月1日まで事前検閲のまま置かれた。新聞・通信社についても1948年の

夏にはすべてが事後検閲に移行している。

1947年末から、占領軍による検閲の任務の比重は、言論統制から情報収集へと移っていった。この一見検閲の緩みのようにも見える変化の背景には、米ソの冷戦や、朝鮮・中国と二つの社会主义国家の出現による、反共へ、逆コースへの占領政策の転換があり、事実、1949年秋のCCDの解散後も、プレスコードは生き残り、原爆作品の没収など、激しい措置が取られている。

ともあれ、CCDの解散を控えて、検閲局に山積した資料にアメリカ側の注目が集まり、その獲得にいくつかの大学が競った。結果的に、当時SCAPの参謀部にいたメリーランド大学教授のゴードン・W・プラングが有利で、メリーランド大学に決まった。《プラング文庫》とは、1950年に太平洋を渡った500余個の木箱に詰めた検閲資料のコレクションを指す。

けれども、プラングの資料は、その後ずっと同大学マッケルティン図書館の地下室に放置されていた。それが、1974年に渡米した奥泉栄三郎氏ら、日本人司書の献身的な努力によって閲覧が可能になった。早い時期にそれを利用した作家江藤淳の調査報告を、私は熱心に読んだのを覚えている。したがって、1981年、夫で日本思想史家の鹿野政直がコロンビア大学客員研究員となり、ともにニューヨークで暮らすことになった時、ワシントン郊外の《プラング文庫》を訪ねるのは、必然だった。原爆体験が私の原点である以上、「加害者の占領軍が、原爆作品をどう検閲したか、ギロギロ見てやろう」と心に決めていた。

とはいえ、新聞1万6500タイトル、雑誌1万3000タイトル、図書と小冊子4万5000点というその規模は、もちろん数日の訪問では一端さえ見られず、翌年2月に改めて一ヶ月の滞在を計画した。以来十余年、プラング文庫の調査を重ね、マッカーサー記念館や、日米の数多くの資料にあたり、原爆作品の検閲についてぼつぼつと調査を進めた。そして、『朝日ジャーナル』、『未来』のほか、自分の主宰する雑誌『いしゅたる』に徐々に発表、「原爆五〇周年」の1995年には、それらを2冊の本に纏めて上梓することができた。

### 禁じられた原爆体験

疎開から東京に戻ってみて、原爆の実態が日本人に知られていないのを目の当たりにしたことはすでに述べたが、それが検閲に関連するなど、当

時は思ってもみなかった。あのころの私は、占領軍によって検閲された新聞・雑誌を日々読んでいるとは、夢にも考えないノンポリ学生だった。それでも、元軍人で戦後は復員局に勤めていた父が、封書を受けとった時に、「やったな」と言いながら見入っていたことは覚えている。

そして、検閲についての記事を発表しはじめると、その都度、私信を検閲された不快な思い出が、読者からの反響となって返ってきた。郵便の検閲に限られるのは、それだけが一般人の目に触れる検閲だったせいで、半世紀前の反発心を忘れず、機会があれば発言する、この一般的レベルの言論感覚には健康なものがある。ところが、メディアの検閲に関する反応となると、文章の発表にかかるような知的エリートほど、なぜか解りにくくなることを、やがて私は発見した。検閲「した側」の意図や活動と、「された側」の受け止め方や対応との、双方を合体させたところに、「検閲の実態」が現れてくるだろうと思い描いていたのとは裏腹に、後者の日本人の側からの検証は難しく、水の流れるように万事を忘れ去る日本人の淡白さと、言論意識の希薄さ、さらに有名な詩人、栗原貞子（1913-2005）の『黒い卵』のケースのように、検閲の目を恐れて自ら作品の削除や処分をした例を、目の当たりにさせられることになる。

それにしても、CCDは、具体的にいかなる種類の表現の流布を阻もうとしていたのか。1947年4月21日から5月20日までの1か月間に、削除と発禁処分にしたカテゴリーの集計がある。（次頁、国立国会図書館蔵、GHQ/SCAP文書から）

ここで一つだけあげる具体例、『雅子艶れず／長崎原子爆弾記』は、被爆当時14歳だった石田雅子が、みすみすしい少女の筆で、原爆の惨禍を活写した記録である。奥付に「昭和廿二年六月二十日」とあるこの本は、長崎地方裁判所長だった彼女の父・石田壽と、占領軍の長崎軍政部司令官だったビクター・デルノア Victor Delnore 陸軍中佐との親交を背景に、異例づくしの検閲過程を辿った。これは魅力的な作品であり、長崎についての叙述を加えるために取り上げるが、稀有の幸運に恵まれた例外的な存在であり、決して典型例ではないことを予め断わっておく必要がある。

まず、長崎軍政部の副官ロジャース大尉 Captain Rogers が、司令官代理として、福岡検閲局司令官宛てに生原稿を送り、検閲局に一蹴される。

カテゴリー	国内で書かれた記事	国外から入った記事
連合国軍最高司令部批判	131	28
軍事裁判批判	1	0
SCAPの憲法作成への批判	5	1
検閲への言及	97	2
合衆国批判	100	120
ソ連批判	50	34
英國批判	16	31
朝鮮人批判	1	7
中国批判	42	9
その他の連合国への批判	4	7
連合国への全体的批判	110	22
満州における日本人取扱いへの批判	10	1
連合国に戦前の政策への批判	1	8
第三次世界大戦の論評	12	0
左翼的宣伝	26	10
戦争宣伝の擁護	11	0
神国の宣伝	23	0
軍国主義的宣伝	230	1
国家主義的宣伝	166	1
封建思想の謳歌	378	0
大東亜の宣伝	108	14
一般的宣伝	233	5
戦犯の正当化あるいは擁護	7	0
占領軍兵士と被占領国の女の性的親密さ	30	0
闇市の活動	10	0
占領軍批判	56	20
食糧危機の誇張	69	0
暴力や社会不安の扇動	219	3
眞実ならざる記述	226	20
連合国軍最高司令部(あるいは地方部隊への)眞実ならざる言及	258	32
時期尚早の暴露	60	26
計	2690	401

事前検閲にはゲラニ通を提出する規則があるのを無視していたのだ。次いで、ロジャース大尉は、ゲラニ通をより上部機関の九州地区軍政部、CIE

(Civil Information and Educational Section) 司令官宛に発送、第三地区検閲局司令官に回送される。地区検閲官ソロプスコイ(Captain Solovskoy)陸軍少佐は、「この本は疑いもなく人を動かし、歴史的な価値があるだけに、日本における出版は、もう少し延期されるべきである」と記し、「発禁処分」とした。

石田家は、出版のために努力を傾けたらしく、名士から庶民にわたる人々に対し、この文によって「アメリカ又はアメリカ軍に反感を持つ」と思うか否かを、問い合わせたアンケートも残されていた。軍政部と検閲局の綱引きの末に、表紙に「假刷」の判を押し、非売品として親族などへの個人的な配布を黙認するという、類を見ない決着となった。

この情報を知った CCD 司令部の PPB (出版、演芸・放送課) 課長ジョン・J・コステロ John J Costello が、激怒したらしいメモが残っていた。この人物は、1993年8月9日の NHK スペシャルにも登場して、「あの件は軍政部の越権行為だ!」と真っ赤になって怒り、雄弁をふるった。「この本は反米感情を煽るから発禁なのだ。この本一冊を許可すれば、誰もが原爆の本を書いていいと考える。三大新聞も連日原爆の悲劇を書き立てることになってしまう。」

### 充分に生かされなかった犠牲

加害者の占領軍が原爆報道を抑圧するのは、自明だ。米国が初の原爆実験に成功した時点で、敵は非白人の国、日本だけで、人種差別が原爆投下の大前提だった。(戦後も列強各國は、自国から遠い太平洋の島々で、数多くの大気圏内や水中での核実験を行い、非白人の島民多数を被爆させ、実験材料として利用した)。占領軍と同行の米国人学者は、日本人学者の研究成果を横領し、ABCC (Atomic Bomb Casualty Commission 原爆傷害調査委員会) を設けて、被爆者に長年の冷酷な〈調査〉を続け、治療は一切しなかった。

それに対して、原爆を落とされた側の日本の対応は、はたしてどうだったのか。

戦後の無念は数々あるが、なかでも一番の無念は、敗戦と占領軍到着との11日間の「ゆとり」もしくは隙間にさえ、日本人の手にあった原爆情報が生かされず、国民の側も受け身の情報にのみ慣れて、能動的に知ろうとはせず、無知のまま七年間の歳月を経過して、歴史の欠落を許した点に

ある。

あの11日間には、同盟通信社の対外無線も、日本放送協会の国際放送も、まだ生きていた。中立国との外電の窓も開いていた。朝日新聞では、二つの被爆地の中間に位置し小倉にあった西部本社がもっとも健闘したのに比し、東京本社は後々まで被爆者に対して非常に冷たかった。大阪にいた各社のカメラマンや記者は、各種の調査団等に随行し、被爆直後に続々と広島に入り、凄惨な写真が多く残されていた。それらは、もちろん、被爆から数日間に写されたものだった。なぜなら、それらの重傷者は数日のうちに死んで、それ以後には写せるはずがなかったから。しかし、敗戦を迎える15日までは大本営や内務省の検閲が厳しく、「原子爆弾」と書くことさえも許されず、ましてそのような凄惨な写真が国民の目に届くすべはなかった。<sup>3</sup>

もしも、あの11日間に、各社、各支社に点在していた被爆者たちの画像を、報道陣が結束して、外信・外電の開いている窓に一気に注ぎ込んでいたなら・・・。トルーマンの原爆投下声明で息を呑んでいた世界に、その凄惨な写真を流していれば、全世界が「核の悲惨さ」を、「核と生命の共存しえない」真理を、ただちに認識しただろうに。その行動は、人類最初の核攻撃を受けた日本人がなすべき「宿命」であり、バーチェットら、外国人特派員のスクープに待つまでもなく、日本の報道陣に与えられた人類的使命だった。だが、それは、果たされなかった。

占領軍が去った7年後、『アサヒグラフ』は1952年8月6日号にそれらの写真を掲載した。重苦しい編集会議の終りに、それまで国民に見せてていなかった「このむごたらしさを余すところなく、世界の人々に見せてやりましょう！」との最終決断がなされた。が、もしそれが、1945年の8月に流されていたなら、遙かに強烈な効果を生み、その後の核戦略・

<sup>3</sup> 驚くべきことに内務省は、日本の無条件降伏の後、占領軍が検閲を介してもなお、明治期以来の国内行政に絶大の権力を振るい、国民生活全般を監視してきた内務省は、連合国軍への無条件降伏の後、占領軍が検閲を開始してもなお、明治期からの検閲を続けていた。9月27日に、天皇が連合国軍最高司令官マッカーサーを訪問し、二人の並んだ“国辱的写真”を載せた29日各紙朝刊（『東京新聞』のみ28日夕刊）を、内務省が発禁とした。写真発表を期待していた占領軍は、ひょっとして、この発禁により内務省の検閲継続に気付いたのではないか。即日、発禁処分の取り消しを指示し、続いて戦時諸法令廃止指示し、これにより内務省の検閲制度がようやく終わりを告げた。こうした政治状況下では、国内での被爆者の凄惨な写真の発表など、望むべくもなかった。（10月6日には新聞紙等掲載制限令の廃止が、10月15日に治安維持法の廃止が、それぞれ公布されている）。

核軍拡競争、そして原発の発展への強いブレーキになり得ただろう。あの日の犠牲を生かし、地球上のすべての生命を滅亡の淵へ追いつめる道筋を遮断する絶好の機会を、逸してしまった。

強烈に意識に訴えるフィルムや、医学資料を略奪し、なまなましい記事や写真を闇に葬ったアメリカと日本。双方の権力の隠ぺいにまかせた7年の歳月が、行動を起こすべき被爆者側に、回復しえないダメージを与えた。隠蔽者たちの目的は、充分な効果をあげたといえる。まさに被爆者は、アメリカと日本の権力によって、二度殺されたのだ。



## アメリカの若者たちを変えるヒロシマ体験

明治学院大学国際関係学部 高原孝生教授に聞く

— 米国からの留学生を広島に連れていく明治学院大学の企画は、いつごろ、どういう意図で始まったのですか？

明治学院大学国際学部が1986年に発足、同時に学部に設置された国際平和研究所が、カリフォルニア大学の平和紛争研究所と協力関係にあったことが基礎となり、カリフォルニア大学と明治学院大学との間に、学生・教員の交換協定が結ばれました。

実際にプログラムが開始したのは、1989年度からだったと思います。当初は春学期のみ、24名前後のカリフォルニア大学生が、明治学院大学に訪れ、英語で提供される授業を受けていました。(現在は春・秋の両学期に、ほぼ同数の学生が来日しています。)

授業のテーマは「平和研究」で、政治、経済、文化と多岐にわたる科目が用意されました。この明学の側で提供する英語授業の中に、日本で学ぶ「平和研究」の必修科目として、広島へのフィールドトリップが組み込まれ、現在に至っています。

現在のプログラムは、アメリカの文脈ではやや狭い印象を与えるという理由から「平和研究」ではなく「グローバルスタディーズ」という名称に変わっていますが、内容は変えいません。広島へのフィールドトリップは、学生からの評価が高く、今後も継続する方針です。

— 旅程は？

資料館訪問、平和公園を現地ボランティアの方々に案内していただく、被爆者の方にじかにお話を伺う、広島の大学教員の講義を受ける、毒ガスをつくっていた大久野島を訪ねる、さらに海上自衛隊基地や旧帝国海軍の地下工場跡のある呉を訪ねる、途中で宮島も観光する、いいカードがあれば野球も観戦する、というのが定番です。

かつては、江田島の旧帝国海軍を引き継ぐ資料館を訪ねたり、広島からの帰路に京都に寄って立命館大学の国際平和ミュージアムを立命館大学生に案内してもらったり、ということをしてきました。主に予算との関係で、今は3泊4日に限定されるようになりました、江田島と京都をプログラムから割愛しています。

最近のプログラムはこんな感じです。

1日目	午前	新幹線で広島へ
	午後	広島到着、袋町小学校資料館見学。 広島原爆資料館、現地NGOによる平和公園見学。
2日目	午前	大久野島（元化学兵器工場）へ。毒ガス資料館の見学
	午後	島に残る遺跡を地元の研究者に案内して頂く
3日目	午前	セミナー、被爆者証言
	午後	宮島 自由行動
4日目	午前	セミナー
	午後	呉訪問、広島出発

— 参加者は、どのようなバックグラウンドの学生たちなんですか？

参加学生のバックグラウンドについての情報は、全くありません。最近は、アジア系の学生が圧倒的多数です。

— このフィールドトリップの位置づけは？ 学生たちに、どんな影響を及ぼすのでしょうか？

私自身は、1997年からほぼ毎年、ゼミ生を連れて広島へのフィールドトリップに同行しています。また、カリフォルニア大学生向けの英語授業も担当していました。その授業の中で「人に殴られても寝ることはできるけれど、人を殴ったらその晩は寝られない（だから、人を殴ってはいけない）」という沖縄のことわざを紹介します。そして「ところで、どうして寝られなくなるのだろう？」と問いかれます。別の授業で、同じ問い合わせを日本の学生に投げると「悪いことをしてしまった」「相手に痛い思いをさせてしまった」という自責の念を、ほぼ例外なく、理由としてあげますが、カリフォルニア大学生は、全く違うということに早くから気づきました。「しかえしが怖いので寝られない」というのです。

文化の違いとは、こういうことを言うのでしょうか。「しかえしが怖い」なら、自分が安心して眠るためには、しかえしきれないほどに相手を痛めつけるか、殺してしまわねばならない、ということになります。おそらく「やられたら、やりかえせ」という文化が、アメリカには根付いているのでしょうか。

日本がこうなっては怖い、という思いで、繰り返し、同じ問い合わせを試みてきたのですが、いつ頃からだったか、日本滞在中に一つの体験を経ると、カリフォルニアの大学生の回答が異なってくるようだということに気づき

ました。それが、広島へのフィールドトリップです。広島トリップを経た後の学生たちに聞くと、だいたい三分の一から半分くらいが、日本の学生のように回答するようになると言えそうなのです。

これは私の観察にもとづく仮説で、しっかりした調査に裏付けられたものではないのですが、そこでは、被爆者の方の体験を聞く、ということが決定的のように思います。被爆者の方のお話は、とてもよい通訳をしてくださる方をお願いしているということもあって、こちらが考える以上に、アメリカの学生に伝わります。涙を流しながら聞く学生も、ほぼ毎回みられます。そして質疑応答の時間に、まず例外なく、あとの方で出てくる質問があります。「Don't you hate us?」というものです。

そうした場でお話ししてくださる被爆者の方は、これもまた例外なく、とんでもない、あなたたちが私と同じようなために逢わないとために、私は話しているのだ、と応じて下さいます。かつては原爆を落としたアメリカ人を憎いと思ったこともあったが、実際にアメリカの人と接して、同じ人間だとわかった、悪いのは戦争だ、というようなコメントもあったりします。そうした回答をもらうと、カリフォルニア大生たちの表情が、みるみる和らぐのがわかります。

自分たちの国がしたことと、今の自分たちとの結びつきを、アメリカの学生は、日本の学生以上に強く感じるようです。この点、あまりひとくりにしてはいけないとは思いますが、日本の若者の方が、戦時の日本軍の残虐行為などへの責任を感じることが弱いような印象を持っています。ただ、こうした「自分の国」と「自分」との結びつきは、何とか自国のしたことを正当化しようとする心理ともつながっていくようでもあります。ですから、広島で私は、不当に自分が責め立てられている、という被害感情をアメリカ人学生が持たないように、緊張感を持って、注意して学生たちを見ています。

深い感情的な体験をすると、身についた文化も変容するのではないかと、私は感じています。また、日本人学生の中で、アメリカ人学生と同じような回答をする者が出てくるのを、私は恐れています。今のところ、その兆候は（明学では）まだありませんが…。他方、この数年、広島に行く前のアメリカ人学生の中にも、日本人のような回答をする者が出てきています。偏見につながってはいけないのですが、たいていはアジア系の学生です。

— アメリカ人以外の、とくにアジアの学生と似たような体験をなさったことはありますか？もし、あれば、彼らの反応は、アメリカ人留学生と比べてどうなのでしょう。同じですか？

カリフォルニア大生に、中国や韓国からの留学生が混じっていることがあります。とくにアメリカ人学生と強いいちがいを感じたことは、これまで、ありません。個別に深く話をできていない、ということかもしれません。

— 第二次世界大戦中、そして、原爆投下後と戦後、米国（もしくは連合国軍）のジャーナリストは、ほぼおしなべて、ジャーナリストである以前にアメリカ人として行動したというふうに聞いています。（例えば、繁沢敦子『原爆と検閲』中公新書）今まで関わっていらした米国的学生たちは、どうですか？彼ら、今のアメリカの若者たちは、どの程度、「アメリカ人」なのでしょう？アメリカ人である以前に人間だと自覚している学生は、どのくらいいるとお感じですか？

まず「人間であること」を意識している学生は、左翼的な学生か、宗教色の強い学生で、むしろ少数民族（ethnic group）としてのアイデンティティーを感じさせてくれる学生が多いと感じています。

例えば、インドシナから難民として逃げてきた少数民族の学生や、日系学生もそうです。日系学生の場合、自分の家族の来歴を意識して来日する学生が増えているような気がします。逆に、中国や韓国系の学生から感じることが少ないので、日本をわざわざ留学先に選んでいるという段階で、既に特殊な学生グループになっているのかもしれません。

こうした中で「アメリカ」は、政府批判が許される民主主義の国、多様性が力となっている国、というポジティブな文脈で意識されているように思います。おそらくカリフォルニアという風土が、そうさせているのでしょうか。

— 高原先生ご自身が、ヒロシマ・ナガサキと関わるようになったきっかけは？

初めて広島と長崎に行ったのは、大学2年の夏（原爆の日）でした。原水禁世界大会に潜り込んで、広島では栗原禎子さんの朗読を聞いたりしました。その時にサインしてもらった詩集を今も持っています。サークルの友人の家を泊まり歩き（広島の郊外と佐世保）、ご家族（どちらも教員）から、被爆地の思いを感じ取ることができました。

また、大学5年の時にオーストラリアのペンフレンドが来日、一緒に流氷を見に行き、広島を訪ねました。宮島のユースホステルでのミーティング、自己紹介のときには、通訳ガイドの免許を取ったばかりだったので、広島を世界に紹介したいと話したら、皆が拍手をしてくれ、その気になったのを、いま思い出しました。

1997年に初めて、明治学院大学の学生を同行させることにして、その引率を、ぼくがすることになりました。

—アメリカ人の学生たちとともに広島訪問を繰り返していくうちに、何か、ご自身の心境や、核軍縮問題の見方、とらえ方等に変化が生じましたか？  
もし、学生の反応や質問で「目から鱗が落ちた」ようなご体験があれば、それもお願ひします。

現地実習の意義を再確認させられました。若いときの人間同士の出会いが、いかに大事か、思われます。

学生たちと少しずれますが、最近、資料館の外にあるノートに書かれた感想に注目しています。外国の方を含め、その圧倒的多数は、戦争はいけない、平和がいい、というものです。「核兵器に反対」ではないのです。今回のケリー国務長官の感想もそうでした。

—《被爆体験の継承》について、ご自分が関わっていらした中で、部分的、あるいは全体的に克服されたとみなせる課題や、今後に残されていとお考えの課題は？

たとえば、将来、直接原爆を体験した人たちがいなくなった時、どうしたら、これまで被爆者の方たちが体を張って事実上阻止してきた核兵器の使用を止め続けることができるか？

残っているのは「継承」といわれている問題です。

「将来、直接原爆を体験した人たちがいなくなった時」、アメリカ人学生のために「あなたがたを憎んでいるかなんて、とんでもない！」と言ってくれる人がどこにおられるか。どうなることかと思います。

また、大きな課題は、原爆展を中国で開催することです。中国政府は、原爆展を、日本が被害者であることを強調するものだとして、国内での開催を認めていません。「被害者面をしているなら、恥ずかしくて証言などできない」（故 久保浦寛人さん）という被爆者の肉声を伝えることができるうちに、中國の人にも、核兵器は絶対にダメだ、ということを伝えたいものです。時間はありません。

## サダコの「つる」をフランスの空へ 美帆＆ミッシェル・シボ夫妻に聞く



—イタリアと日本は、どちらも第二次世界大戦で全体主義体制が崩壊し、戦後、平和主義の憲法をもちながらも、米国の傘の下に入るという矛盾した立場という共通のバックグラウンドを持っています。それに比べると、核兵器の所有国フランスで広島、長崎の原爆の実相を伝えるというのは、ずっとシビアなのではないかと思いますが、ご夫妻で長年その活動をなさっていらっしゃるお二人の広島や長崎との関りは、どのように生まれたのですか？

ミシェル：僕が初めて広島の原爆資料館を訪れたのは1975年12月でした。原爆の破壊力は想像以上でした。特にじっと見入ってしまったのは、くっ付いた茶碗でした。かなり高い温度でないこんな具合に陶器が溶けて接着することはあります。しかも、茶碗は日常生活の必需品ですから、この周りにいた人々はどうなってしまったのかと思うと、茶碗の中から人の呻きが聞こえてくるようでした。

美帆：実は、この時、新婚旅行だったのです。最初、夫に「京都と奈良に行こうと思うけど、他に行きたい所がある？」と聞いたら、ヒロシマと言ったのです。

ミシェル：フランスでは「原爆一発でヒロシマが消えた」と言われていたけど、そこに居た人間がどうなったのかは知らなかったから。それに僕が若い頃は徴兵制度があって、軍隊では「原爆が落ちたら、机の下に隠れろ」と習ったからね。実際に被害を知ったら、ショックでしたよ。君はそれほどでもなかったみたいだったけど。

美帆：そうね、私もこの時初めて広島へ行ったけれど、父の書棚に第二次世界大戦の写真集があって、子どもの頃から原爆の写真を見たり、小学校で原爆映画を見たり、原爆の詩を学んだりしたから、資料館で驚きはしなかった。でも、資料館を出るとき、海外の訪問客の感想ノートを見つけて、二人でどんな国の人人が書いているのか覗いてみたのよね。アメリカ人と同

じくらいロシア（当時はソ連）の人がいて、びっくりしました。そして、フランス語で書かれた感想を見つけた時、衝撃を受けました。「誰のせいだ？」と書いてあったから。戦争を始めた日本が悪いのじゃないか、と言われているみたいで。

その後、近くのお店でお茶を飲むことにしたのです。客は私たちだけ。そのお店の人が私たちの後に入ってきた人と話している内容が耳に入ったの。ケロイドの話でした。その時、背に水を浴びたようなショックを受けました。思えば、被爆者の声を聞いたのは、私もそれが初めて。原爆投下から30年経っても、後遺症に苦しんでいる人たちがいることをその時に実感しました。

— 広島訪問が、原爆の実相を伝える活動に繋がったわけですか？

ミシェル：僕にとっては広島の訪問が一番大きな動機ですね。けれども、何をしたら良いのかは、まだわからなかった。

美帆：私はその後数年経って、母親になってからですね。子ども達に核の脅威がない世界を残したいという思い。しかも、ちょっとした出来事があったんです。同じ建物に住むフランス人の8歳の息子を一日預かったとき、その子が模型飛行機で一人遊びを始めたんです。居間で急に「ダメだ！ 今度は原爆投下だ！」と叫んだので、飛び上がるほどびっくりしました。私の子ども達は赤ちゃんで、眠っていたのですが、自分の子どもが大きくなってこんな遊びをしたらどうしよう、原爆のことはちゃんと教えてやらない。そう思ったのです。で、即座にこの男の子に原爆写真集を見せて、説明しました。

ミシェル：この原爆写真集は日本の市民団体が制作した立派な本でした。

美帆：「被爆の記録を贈る会」(Hiroshima-Nagasaki Publishing Committee)が編集した「被爆の記録」(HIROSHIMA-NAGASAKI Images des Bombardements Atomiques)です。

ほぼA4用紙大の大きさで350ページに500枚の原爆写真を収めた、それ以前にない資料集で、たくさんの市民が加わった草の根のグループによる制作です。画期的だったのは説明が日本語と英語だけでなく、フランス語、ドイツ語、スペイン語、エスペラント語と、それぞれの版が出版され、世界に広める運動が始まったのです。と同時に原爆展もアメリカ、ソ連を始めたくさんの国で行われました。

ミシェル：そこで僕たちはこの写真集をフランスで広めるために非営利団体

「広島・長崎委員会」Comité Hiroshima Nagasaki を結成したのです。その後、同じ日本の団体が「予言」Prophétieなどの原爆映画三本を様々な言語で制作しました。アメリカは日本を占領下に置いた時期、原爆の写真やフィルムを没収し、30年間、軍事機密として隠していました。のために、多くの事実が知らされず、原爆の被害も過小評価されていたのです。これらの映像を日本の市民団体が買い取って、映画を制作したのです。僕たちは貯金を下ろして最も衝撃的な仏語版のフィルム「予言」Prophétie を買い、フランスで上映運動を始めました。1982年のことです。

— 貯金を下ろしてまで、原爆の実相を知らせたいと思う、その原動力は何だったのでしょう？

美帆：1945年8月15日に、第二次世界大戦は終わりましたが、その後も体の中で原爆が燃え続けている被爆者にとっては、いまだに戦争が終わっていないからです。しかも、核兵器はその後増え続けて、核実験も繰りかえされている。原爆の問題は、日本人だけの過去の悲劇ではなくて、いつでも再び起こり得ることだから。

それから、もう一つ理由があります。日本には広島と長崎だけでなく、第三番目の核兵器の犠牲者がいます。私のふるさとの近くにある焼津という町の23人の船員です。彼らは1954年3月1日にアメリカがビキニで行った水爆実験で被災しました。全員放射線に犯され、一人が死亡しました。この水爆は広島型の1000倍の威力があり、当時ソ連とアメリカが大型核兵器の実験をくり返していました。実際には1000隻近い日本の漁船が被災した事実が今日明らかにされました。これらの実験で日本人の大事なたんぱく質源である魚のボイコットが始まり、日本の社会全体を揺らがせたのです。私は5歳でした。これを契機に、日本の母親達が核兵器に反対する運動をはじめ、1955年に始めて原水爆禁止世界大会が開かれるようになったのです。けれども、1980年代もフランスはポリネシアで核実験をくり返していましたし、フランスの主要政党はすべて核兵器所有を支持していましたから、このような映像が必要でした。上映運動のおかげで、「予言」の抜粋がフランスのテレビ番組に使用されるようになりました。

— フランス人の反応はどうでしたか？

美帆：フランスでは原爆映画を見た後、必ず討論が行われます。しばしば、フランス人は核兵器の問題からそれで、現在の戦争や紛争の話に熱中して

します。核兵器は戦争の抑止になるから緊急の問題ではない、それよりも今たくさんの被害者がでている通常兵器の紛争や戦争の方を何とかしなくちゃいけない、という反応が多かったです。それに、日本はアジア、特に中国で大量虐殺を行ったから、第二次世界大戦を終了させるためにも、原爆投下は必要だった、というアメリカの言い訳がそのまま信じられていきました。

ミシェル：そこで、広島原爆を生き延びた医師で、長い間被爆者の治療をしていた肥田舜太郎先生に何度も訪問していただき、フランス各地の高校や市町村で講演と討論会をしていただきました。放射線による害が長期にわたることを知った人々は核抑止に疑問を持ち始めました。そして、高校生たちは被爆者の平均年齢を知って、被爆者の証言が聞けなくなったら、どうするべきか、という話し合いましました。その結果、自分たちが「共同の記憶」*Mémoire collectives* にならなければいけないと考えたのです。つまり、自分たちも被爆者の記憶を語り継いでいこうと。

美帆：でも、講演の回数には限界がありますから、原爆投下40年になる1985年に先生の証言やいただいた資料を基に、フランス語で原爆に関する本を出版したのです。予約注文をとって。このLittle Boy: *Récit des jours d'Hiroshima* が反響を呼び、フランスの著名な国営テレビの討論番組に肥田先生が出演しました。この時、テレビ局の担当者から相談を受けたんです。『ナガサキの郵便配達』を書いた著名な作家ピーター・タウンゼンドが出演を拒否しているんだけど、どうしたら良いかって。拒否した理由は、原爆製作に関わった物理学者や投下した戦闘機の乗務員たちも出演するからだということでした。それで、「郵便配達」の谷口稜壁さんを招待すれば、きっとタウンゼンドもOKするだろう、とアドバイスしました。そして、テレビ局の担当者に「広島は最初の原爆被災地だ。長崎が最後の原爆投下地になるかならないかは私たち次第だから重要だ」と言いました。その結果、谷口さんもタウンゼンドと一緒に出演してくださいました。視聴率は、なんと25%！その後、原爆関係の本を2冊出版しました。2冊目の*Messages pour la planète bleue* 「青い地球のためのメッセージ」の出版からは資料センターとしての活動であることがわかるように、会の名称をInstitut Hiroshima Nagasakiに変更しました。3冊目は「はだしのゲン」の著者、中沢啓治の半生記です。（「ヒロシマでぼくは六歳だった」*J'avais 6 ans à Hiroshima*）こうした本を出版するためには、多くの協力者や支持者が必要です。核抑止論が浸透しているフランスですが、それでも核兵器に反対する人々もいます。

ミシェル：10年くらい前から、いろいろ変化が生れていますね。原爆の投下理由がソ連に対する戦略であり、人体実験でもあったことをフランスの歴史家たちも検証し、ドキュメンタリーでも報道されるようになりました。また、ミッテラン大統領時代に国防大臣であったポール・キレスが核兵器に反対して著書*Arretez la bombe*（核兵器を廃絶せよ、の意）を出版し、メディアにも盛んに意見を発信しています。残念ながら、まだまだフランスの核政策を変えるほどの力にはなっていませんが。

美帆：私はフランスの若い世代に期待しています。50代以上のフランス人には核兵器は抑止のために必要であり、原発による廃棄物の問題は科学が解決してくれると未だに思っている人がたくさんいますが、若い世代はむしろ反対の考え方ですね。私は若い世代の教育が大事だと思います。

— それで、アニメ『つるにのって トモコの冒険』をお作りになった…。

美帆：ええ。日本のアニメは、フランスでも大人気なので、子どもたちに伝える手段として選びました。ただ、日本にすでにそのころたくさんあった原爆についてのアニメは、破壊力ばかりが強調されていて、放射能の長期にわたる影響力があまり伝わってこないように思われたんです。それに、子供に恐怖心を抱かせるのではなく、むしろ、史実を知っても何らかの力が湧くような、命の尊さが伝わってくるような作品が必要だと考えました。そこで、思いついたのが、広島で二歳の時に被爆し、10年後に白血病で亡くなった佐々木禎子と「原爆の子の像」建立の実話をもとにすることです。とっても元気だったサダコが、急に不調を訴えて入院、原爆で受けた放射能のために白血病になったのは、戦後10年もたってからでした。千羽つるを折ったら病が治ると信じながら死んだ彼女の慰靈と、再び子どもたちが戦争の犠牲にならないことを祈って、友人たちが「原爆の子の像」を建てる運動を始め、外国からも励ましの手紙が寄せられる拡がりを見せた。この話をフランス人にするとたびに、子どもから大人までじっと耳を傾けて、時には目を潤ませる人もいるんです。それは、原爆によって引き起こされた顔の見えない無数の死というものではなくて、折鶴に思いを託して、一人の少女が必死に生きようとした具体的な事実が、人々の心を打つからでしょう。そして、サダコが折った鶴を自分でも折ってみたいと思い、折れるようになると、話とともに人に伝えたいと思う、そんな気持ちにさせてくれる実話なんですよね。でも、映画を作るのは、とても大変なことで、1988年に日本で募金を募る「ピース・アニメの会」を結成しました。漸く資金が調達でき、映画が完成したのは1993年のことです。この作品には、核兵器の本質を子ども達に実話を通して伝えることだけでな

く、人類を絶滅する破壊力をもつ核兵器の存在に押しつぶされないで、自分できることを何かしようという意志を持って欲しいという願いを託しました。人ひとりが出来ることは小さなことですし、魔法の棒を一振りして一挙に世の中を変えることはできませんが、誰かが最初の一歩を踏み出せば、必ず同じ志を持つ人々が集まってきます。

ミシェル：確かにそうだね。君はこのアニメの英語版とフランス語版も作ったけど、それから十年以上も経って、インドでヒンディー語版やピサでイタリア語版を作ってくれる日本人が現れるとは思ってもみなかったよ。

美帆：このアニメを見て討論する度、子ども達からいろいろなことを学びました。

「大人はなぜ戦争をするの？」という質問は必ず出ます。また、「日本人は原爆を投下したアメリカに復讐したいと思わないのか？」と聞く子たちもいます。そういう子どもたちに私たちは真剣に答えなければいけません。

ミシェル：2000年にユネスコが「平和の文化」を創造しようと提唱して、この年から10年間を「平和の文化の創造期間」としました。残念ながら、今のところ「戦争の文化」の方が広まっているけれど、「平和の文化」憲章には不平等のない社会、自由に発言できる社会や人の営みなどが提唱されています。僕たちはAFCDRPというフランスの平和首長会議を組織し、市町村を中心に「平和の文化」を広める努力をしています。平和首長会議は現在世界の161カ国にある7000を越す都市が加入している国際組織で、会長は広島市の市長です。

— ミシェル・シボさんは、たしか、フランス平和首長会議の創設者で現在も事務局長でいらっしゃいますね。

ミシェル：はい。この組織の大きな目的は核兵器のない平和な世界の実現です。フランス平和首長会議ではその活動に加え、「平和の文化」の概念を広め、実践することも重要な活動としています。なぜなら、男女の不平等や人種差別がはびこり、格差が広がる一方の社会は決して平和ではないからです。

美帆：私たちは原爆の被害を正しく伝えることから始めました。その目的を継続しながら、本当の平和とは何か、という事をも考えざるを得ません。ともすると、「決して使われることはないだろう」と思われている核兵器の問題はおざなりにされがちですが、事故や小さな紛争から核戦争に発展する可能性は高いのです。それが地域的な被害であっても、地上の環境汚

染や気候異変も引き起こします。また、このような研究に使われる莫大な軍事費を人々の生活を向上するために使用するべきだと思います。

ミシェル：僕たちが住んでいるパリ郊外のマラコフ市では市役所と市民団体が協力して一年間の平和活動計画を立てています。例えば、アーティストの平和絵画展や、9月21日の国際平和デーに市の図書館で「平和を読む」というイベントをしています。毎年平和と戦争に関するテーマ、例えば「戦争と女性」について書かれた本を紹介し、著者の講演をしたり、図書館にある関連書物をリストにして市民に宣伝したりするのです。また、アーティストの平和絵画展は市の施設に展示するだけでなく、町内のお店にも協力を求め、店のショーウィンドやレストランの内部にも展示してもらっています。大金をかけなくても、市民参加の平和イベントができます。

美帆：それぞれ工夫したイベントが成功すると、フランス平和首長会議のメンバー都市や他の都市にも広めたり、また広島から子ども達のマリンバ演奏団を招待して、メンバー都市で演奏したり、フランスの子ども達と交流する企画もしています。このような地道な活動が次ぎの世代に引き継がれていくことを願っています。

— どうもありがとうございました。



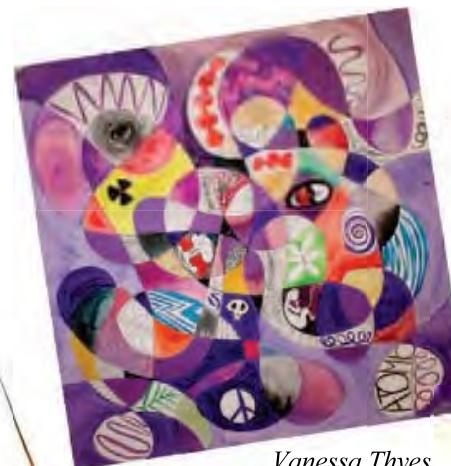
41ページとこのページのカットは、美帆シボ考案、有原誠治監督のピース・アニメ「つるにのって トモコの冒険」（虫プロダクション、1993年）から



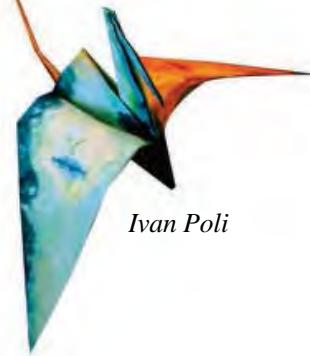
ピースアニメ「つるにのって トモコの冒険」  
イタリア語版（2015年）

アルバム 路上ペインティング for Peace  
ピサの空に舞う折り鶴たち  
主催 GRUppo Ali Dipinte

平和のための路上ペインティング第一弾が行なわれたのは、2015年7月4日、土曜日の午後、ピサの旧市街、繁華街の真っただ中にある広場。20余人のアーティストたちが参加、キャンバス用の地塗りを施した150センチ四方の紙に、近年、日本でも時々見かけるイタリアの《平和の旗》の七色から一つ、ベースの色を選び、思い思いの絵を描いた。描かれた作品は、乾かしてから折り鶴に。核廃絶を訴えた「ラッセル・AINシュタイン宣言」発表から60年にあたる7月9日の夕方、同「宣言」の公開朗読の会場、同じ広場に飾られた。



Vanessa Thyes



Ivan Poli



Raffaele Boni





Martine Friselli



Pietro Caritai  
Valeria Celso  
Eloisa Del Bravo



Chiara Celli  
& Esteban



Estrella Lucas



Beatrice DeLaurentiis



Stelle Confuse



Rohan Kahatapitiya



Samantha  
Bounous





Alice Mancini



Samoa Landi



Chiara Bugliani

路上ペインティング第2弾《平和のためのみんなの手》の開催日に選ばれたのは、広島の原爆投下から10年後、12歳の時に後遺症の白血病で亡くなった佐々木禎子さんの60回目の命日前夜、10月24日。

会場は前回と同じ広場で、20数人のアーティストたちが、戦争のない世界を願う子どもたちの象徴的存在となったサダコに想いを馳せながら、30メートルの布を分かれ合い制作に取り組んだ。

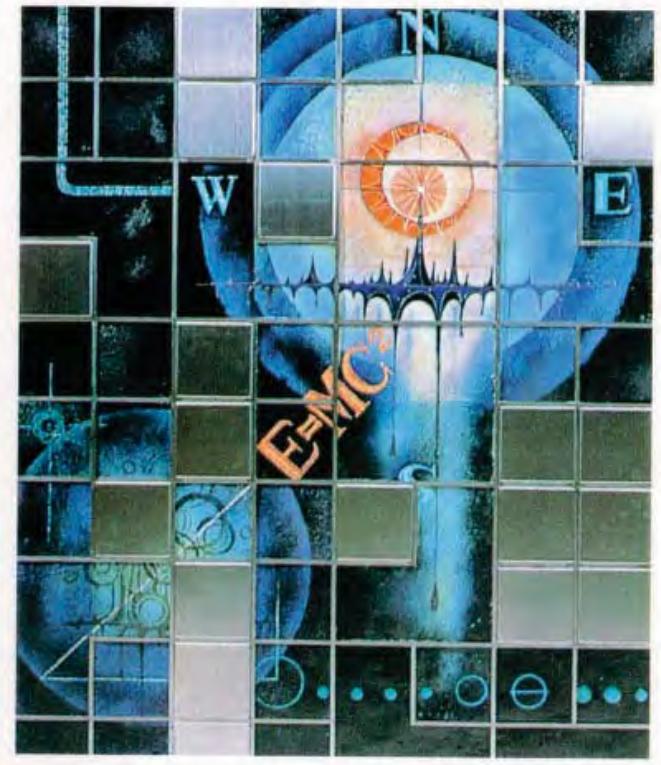
これらの作品は、地元の小中学生約400人の手で描かれ折られたつるとともに、2016年5月から6月にかけて、ピサ市のグラフィック美術館に展示された。



[www.gruppoalidipinte.wordpress.com](http://www.gruppoalidipinte.wordpress.com)

写真およびレイアウト: Raffaele Boni, Tiziana Caliò, Chiara Celli, Elisabetta Cardella, Martine Friselli, Stefano Puzzuoli, Yukari Saitō

田中稔子 壁面七宝 作品



メッセージ - 1980  
広島市長からローマ法王ヨハネス・パウロ2世へ贈呈  
(84 x 100 cm)



スペース・サウンズ - 1980  
(100 x 48 cm)



展望 - 1994  
(110 x 100 cm)



終章 - 1999  
(180 x 110 cm)

体験を「理性」の肥しに  
～監修を終えて～

齋藤ゆかり

「放射能の影響こそ、核兵器が、ただでさえ恐ろしい普通の兵器とは異なる最大の点です。」

被爆証言のためにイタリアのトスカーナ州とウンブリア州を旅行中、田中稔子さんは、繰り返し、繰り返しそうおっしゃっていた。核兵器がもたらす非人間的な長期にわたる苦しみについては、広島・長崎原爆投下から70年を前に朝日新聞が被爆者を対象に行ったアンケート調査の結果からもはっきりと読み取れる<sup>4</sup>。回答をよせた5762人の被爆者のほぼ半数が、「被爆の影響で子や孫の健康に不安を感じる」と答えているからだ。

原爆の重い遺産がいまだ多くの人々を肉体的、精神的に苦しめ続けているわけだが、この悲劇から日本人、ひいては人類全体が得たはずの教訓は、いったいどうなったのか。

同じ朝日新聞のアンケートによれば、回答者の50.7%が、自分たちの体験について、次世代に「全く」もしくは「あまり」伝わっていないと考えているそうだ。さらに、昨今の米・韓国関係の悪化や世界各地の紛争を反映してであろう、63.5%にあたる3656人が「この10年で核兵器が使われる危険性が増した」と感じているという。

実際、日本国内の事情といい、国際的な状況といい、被爆者や核の脅威に抗するすべての人々にとって、落胆の種は枚挙にいとまがない。その筆頭に挙げられるのが、およそ民主主義の原則を無視し、広島と長崎の犠牲も踏まえて書かれた平和憲法を平気で踏みにじり、自ら核兵器を持つことに対する关心を示す日本政府の態度だろう。また、最初の原爆投下を行った国の代表が、何十年もの歳月を経てようやく被爆地を訪問し始めた一方で、核拡散防止条約（NPT）再検討会議（2015年4～5月）の最終文書案では、世界各国の指導者に被爆地訪問を促す文面が中国の反対で削除されてしまった。中国政府によれば、日本が受けた被害について語るのは、日本軍の蛮行を曖昧にすることになるからだという。その屁理屈よりもさることながら、ここでも、過去と誠実に向き合おうとしない日本政府のツケが、お門違いの相手に回わされる現象が起きている。

<sup>4</sup> 朝日新聞 2015年8月2日付朝刊、「放射線『今も不安』55% 被爆者5762人アンケート」

はたして、ヒロシマ・ナガサキの犠牲はすべて、水泡に帰しつつあるのだろうか？

私自身は、そうは思わない。

これを書いている2016年5月3日の東京新聞には、「世界は広島をどれだけ知っているか」と題し、海外で出版された原爆文献リストのデータベース化に取り組む国内外30人ほどの研究者たちの活動が紹介されている。これまでにリストアップされたのは、なんと69言語1800点で、調査結果は年内にもインターネット上で公開される予定だという。

「広島・長崎の体験を人類がどう共有してきたかを俯瞰できると思った」と説明する広島国際大元教授の中村朋子さんは、1960年代から英語の原爆文献のリストアップと解説をライフワークとしてきた言語教育の専門家。曰く、「原書に心を動かされた人々の熱意で多くの翻訳が生まれている。調査から被爆の実相を草の根で届けようとした人々の努力が浮かび上がってくる」<sup>5</sup>。

広島を訪れる外国人の数も増えているようだ。平和記念資料館の昨年度の外国人入館者は、統計を取り始めた1970年以降最多の338,891人だったそうだが、実際、資料館の情報の翻訳も多言語化が進んでいる。

これらのニュースは、近年、私がなんとなく受けていた印象、すなわち、歳月の経過とともに広島・長崎の被爆体験と人類との関係に起こりつつある、かたちと中身の変化を裏づけてくれるように思われる。

本書の準備期間中、ふと、私自身の原爆をめぐる個人的な体験が俄かに蘇ってくる瞬間が幾度かあった。

はじめて被爆地を訪れたのは、小学校5年生の春休み。家族で九州を旅した機会に長崎に立ち寄った。次いで翌年春には中国地方をまわって広島を訪問した。資料館の展示物や保存されている被爆建造物から特に強烈なショックを受けた記憶はないものの、「ノー・モア・ヒロシマ、ノー・モア・ナガサキ」と題し春休みの宿題として出したレポートが、今でも家のどこかに残っている。

その後も、原爆と向き合う機会は何度かあった。もっともそれを特別の問題としてとらえていたのではなく、かなり早くから関心を持ち始めた社会問題の一つに過ぎなかった。時代は、ようやくベトナム戦争が終わり、公害問題が新聞で頻繁に取り上げられるようになって、お隣の韓国の軍事政権が日本社会でも少なからず不安をかき立てていた1970年代から80年代にかけてだ。いま思えば、当時の私は、原爆が、日本の市民なら避けては通れない課題の一つであることを、改めて問うまでもない「常識」

<sup>5</sup> 東京新聞、2016年5月3日朝刊特報欄

のようにとらえていたフシがある。

おそらくそのような認識に他の縁も重なって、大学時代には、本書でシボ夫妻の話にも出てくる「子どもたちに世界に！被爆の記録を贈る会」のボランティア活動をしたり、10フィート映画運動のドキュメンタリーを大学祭で上映するために奔走したりした。イタリア留学が決まった時、厳しい選別を経てスーツケースに収まった品々の中には、「贈る会」編の原爆に関する英語とフランス語のブックレットが何冊かあった。ヒロシマ・ナガサキは、私が自ら日本人としてのアイデンティティーを自覚、認識できる数少ない要素の一つだったからだ。あたかも、日本人に生まれた以上、他の國の人間よりも義務をひとつ余計に担っているかのようだ。

こうしたスタンスが、はたしてどの程度海外在住の日本人に共通するもののかは、わからないが、2003年暮れ、美帆シボさんの自伝的著書『フランスの空に平和のつるが舞うとき』を読んだ時、ああ、義務を一つ余計に担っていると感じている日本人は私だけじゃないんだわ、と仲間を見つけたような共感を抱いたのを覚えている。それから2年して、ジャーナリズムの仕事で集積した情報と人とのつながりをもとに資料センターの設立を思い立ったのは、まさにシボさんから得たインスピレーションのおかげだった。

かくして2006年初夏にスタートした資料センター《雪の下の種》だが、本書には、もう一人の資料センターの「恩人」にもご登場いただいた。明治学院大学の高原孝生さんである。高原さんは、この10年間、私たちの活動に数々のご指南を頂いた。2008年5月の9条世界会議や、12年1月と12月の脱原発世界会議への参加のほか、15年にセンターがイタリア語訳を出した長崎の漫画家西岡由香さんの『さよなら、アトミックドラゴン』の存在を教えて下さったのも、そして、ヒロシマ・ナガサキ原爆投下70年にあたりイタリアまで証言に来てくれる人を探していた時、適任者を紹介して下さったのも、高原さんにほかならない。

一方、3篇の詩作のほか、広島での体験証言と記者としての調査報告を合わせて提供して下さった堀場清子さんのご協力は、言わば、私が母からもらった「遺産」である。堀場さんは、1960年代半ばまで共同通信社に勤めていた母の元同僚で、母の没後から始まった10年来のお手紙のやり取りが、ここに素晴らしい実をもたらしてくれた。

とはいえ、こうして集まった成果も、ヒロシマ・ナガサキが縁で得た共訳者、ロレンツォ・バスティーダさんの「痒い所に手が届く」絶大な協力がなかったら、イタリア語で立派に発表することはできなかっただろう。

被爆者の平均年齢は、ついに80歳を超ってしまった。被爆体験の生の声を聴くために私たちに残された時間は、本当にわずかしかない。これは、

いかんせん、抗しようのない現実だ。

にもかかわらず、私は、絶望的な思いに身を委ねる気には、どうしてもなれない。なぜなら、「ピカドン」に相当する英語を求めて資料館の声なき「ものたち」の声に耳をそばだてるアメリカの詩人アーサー・ビナードや、シボ夫妻談の、被爆者の証言が聞けなくなった時のために自分たちが「共同の記憶」にならなければないと考えたフランスの高校生たちのような、数十年前には想像すらできなかった新しい感性に大きな希望を見出すことができるから。そして、そのような新しい感性は、70年といった節目ばかりでなく、日常的にそれを大事に育てる努力を私たちが続けていけば、きっと遅しく成長していくにちがいないと信じるから。

被爆者が語り伝えてくれた直接体験を、私たちは、新しい世代の普遍的な「理性」の豊かな土壤へと育むすべを学ばなければならないと思う。日本人として生まれた以上、ほかの国の人間よりも義務を一つ余計に担っているのだと信じていた私のような認識が、時代遅れのものとなり、ヒロシマ・ナガサキが日本人のみならず全人類共有の歴史遺産となるように。とりあえずは、ひたすら種を蒔き続けよう。

日本国憲法の69回目の誕生日に、ピサにて

## 資料センター《雪の下の種》の10年 刊行物（イタリア語）

### ブックレット「ジェルモーリ（モヤシ、新芽の意）」

Germoglio n. 1: Brian Covert, *Dentro al fumo: a colloquio con Makoto Oda, scrittore e attivista*, 2006 (B.コバート&小田実対談「黒煙のなかで」)

Germoglio n. 2: *Calpestando Aboji e Un sogno bello ed esilarante. Due racconti di Makoto Oda*, 2007 (小田実「アボジを踏む」「痛快でいい夢」伊訳 M. Suriano)

Germoglio n.3: *Hiroshima all'Italia per dire "Mai piu' uranio impoverito"*, di N. Toyoda, H. Shimizu, S. Divertito ecc., 2008 (「ヒロシマからイタリアへ ノーモア劣化ウラン」豊田直巳、清水仁、S.ディヴェルティートほか)

Germoglio n. 4: *Makoto Oda e "Ichigo ichie - Ogni incontro è irripetibile"*

(DeriveApprodi, 2008) di AA.VV. (「小田実の終らない旅」追悼文集伊訳、吉川勇一、宮田毬栄、坂元良江ほか)

Germoglio n.5: *L'articolo 9 della Costituzione giapponese per tutti*, di I. Anzai, J. Galtung, Y. Saitō, 2009 (「みんなの日本国憲法 9条」、安斎育郎&ガルトウング対談、9条世界会議報告)

Germoglio n.6: *Il cappio giapponese: Un nodo difficile da sciogliere La realtà della pena di morte e del movimento abolizionista in Giappone*, 2011 (「なかなか解けぬ絞首縄：日本の死刑廃止運動」田鎖麻衣子、安田好弘ほか)

Germoglio n. 7: *"Tutto questo si potera evitare...."* (Senza la centrale di Fukushima), di R. Kisaka, A. Binard, A. Baracca, M. Hashimoto, ecc., 2012 (「原発さえなければ」木坂涼、A.バラッカ、橋本勝ほか)

### 日本の作品のイタリア語翻訳企画

小田実「終らない旅」(新潮社) マヌエーラ・スリアーノ訳

Makoto Oda, *Ichigo Ichie: Ogni incontro è irripetibile*, DeriveApprodi, 2008

白六郎「漫画版劣化ウラン弾」(合同出版) 稲垣厚子、齋藤ゆかり、A.チェラントラ訳  
Rokurō Haku, *No alla guerra, No al nucleare. Le armi all'uranio impoverito che distruggono l'uomo e l'ambiente*. Associazione Altrinformazione, 2011

豊田直巳「フクシマ元年」(毎日新聞社) 齋藤ゆかり・マリーナ・フォルティ訳

Naomi Toyoda, Fukushima, *Fukushima: L'anno zero*, Jaca Book, 2014

西岡由香「さよなら、アトミックドラゴン」(凱風社) 齋藤ゆかり訳

Yuka Nishioka, *I draghi atomici di Fukushima: Dire addio alle bombe e all'energia nucleare*, Associazione Altrinformazione, 2014

美帆シボ考案、有原誠治監督 ピースアニメ「つるにのって トモコの冒険」齋藤ゆかり・ロレンツォ・バスティダ訳、声優：劇団サッキ・ディ・サッピア

*Sulle ali di una gru: L'avventura di Tomoko.*, Alfea Cinematografica, 2015

ピカッときて、ドンで一切が壊滅したのだから、広島の  
にんげんにはあくまで「ピカドン」で、「原子爆弾」は  
よそよそしい言葉だった。

堀場 清子

「原子爆弾」も「核兵器」も核開発をすすめた人たちが  
つくった呼び名。それに対して「ピカドン」は、生活者  
が生み出した言葉だ。具体的に、生きた言語感覚で、核  
分裂をとらえていて、その言葉のレンズがぼくに新しい  
視点を与えてくれた。同時に、「ピカドン」に相当する  
英語が存在しないことにも気づいて、課題を背負った思  
いがした。

アーサー・ビナード